女學雜誌

各土曜日出版

第百六拾號

當府內無郵稅

一册六錢

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 160. MAY 4TH, 1889.

第百六十號目錄

PRESENT DAY:—Is there no Affinity between Moral and Politics?

EDITORIAL:—Progress of Woman in Japan (The Developement of Jogaku-Zasshi).

LEADING ARTICLES:—The Natural Law to Progression of Noblesse. By Dr. H. Kato. I am a Sister in Japan. By Mrs. T. Nakajima.

CRITICAL NOTES:—Evolution Theory of Japanese Women.

MISCELLANIES:—"Beauties of Nature." "The Husband Comes not Back." "The Cry of Novel." "Careless Marriages." "Poetry and Benevolence." "The Misfortunes of Literary Men." "A Talk in Astronomy." "Swift."

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES:—"John the Baptist."

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

時論 道德と政事は同胞にあらざる乎

社說 日本女流の進步、日本「女學雜誌」の進化

論說 貴族發達進化の天則（加藤弘之）○余は云はん日本の姉妹なりと（中島俊子）

批評 日本女子進化論○楚囚之詩

叢話 萬象皆な美なり○良人歸らず○小說の歎○スウヰフト論○不注意なる結婚○歎を見て仁、不仁を知る○文學者の不運○天文學の辨○玉堂隨筆

兒籃 憐れなる娘

傳記 野に叫ぶジョン、ゼ、バプチスト

詩二首○歌十首○佳人の美談（鴨郁散士）

開書 東京府會賄賂事件の委員各位に呈す

時事 宮庭錄事○女學生洋行の可否○賄路の成行○咸陽の市○福澤氏の家門幸福なりや○山川氏の母勝齊院○外三件

片々 遠山きぬ子○篤志看護婦人會○其他十件

外報 婦人撰擧權○女界最大の學校○外一件

WOMEN IN JAPAN.

(1) *During the previous month, H. I. M. the Empress has visited respectively the Kōtō Jogakko (The High School for Girls.), The Industrial School for Girls, and The Noble's Girl School.*

(2) *Miss Nobu Kōda has been ordered by the Government to spend a year in America and two years in German for the study of violin.*

(3) *Miss Katsu Aikawa who proceeded to Berlin last month on her own charges is a graduate from the Normal School. She had been carrying on the study of the German language while teaching in the Industrial School. She is 25 years of age.*

(4) *Mrs. Kaji Yajima had resigned her position as the "President of the Woman's Temperance Society," on account of the consequences of a fall from a jinrikisha. However as she is recovering, many hope for her returning to her work.*

(5) *The new building intended for the Noble's School has just been completed, and a removal from the present temporary quarters will soon take place. The old building is to be used by the "Joshi Kyoiku Shorei Kwai", a Seminary for girls to be conducted by several English ladies and some distinguished scholars and merchants.*

(6) *A New Woman's Magazine has just been started called "Kuni no Motoi." (The Support of the Nation.) It is mostly conducted by the students and teachers of the "Kōtō Jogakko."*



女學雜誌 第拾壹巻 第百六拾號 明治二十二年五月四日發兌

時論

○道德と政治は同胞にあらざる乎。

孟子梁の惠王を見る、王曰く叟千里を遠しとせずして來る、亦た以て吾國を利する有んとする乎、孟子對て曰く、王何んぞ必らず利を曰はん亦仁義ある而已矣。孟子が此の答辨は果して一國經綸の道に合へるや否や、是れ、アリストーテルよりマキヤベリー、ホッブ、アウステン、を經て隔週雜誌(フォートナイトリー、レビウ)に於けるフレデリック、ハルリソンに至る迄、亦彼のベンタムが功利論の輸入されてより、政治家磊落、公私兩德、忠愛論、國家論を經て今日の東京諸新聞紙に至るまで、常に斷えず、議論ある所ろのもの也。

然れども若し宗敎と政治とを劃乎として區別すべきものと爲さば、道德論と政治とも亦た決して混淆すべきものにあらじ。蓋し宗敎は靈に屬し、道德は心に屬し、政治は身に屬す、故に若し政治を以て地球界の事と爲さば、道德は空氣界の事にして、宗敎は天界の事なるべし、左れば、政治は主として外面的器械的に關わり、道德は主として心情的交際的に關わり、宗敎は主として靈性的崇拜的に關はる、見よ肉躰は地上に歩ゆみ、心思は氣中に翺翔し、靈魂は天空に逍遙す、而して天と地の相去ると極めて遠きのみならず、彼の曖然たる空氣と天との間ほ決して一物にあらざるとを知らば、空氣と地面とは亦た均しく一物にあらず、道德と政治とは決して同一物にあらず。

之を略言すれば、道德は、極めて高く最とも美なる理想を確と打立て、人をして全心の我欲を擲うち全力を盡して此の至善の境ひに到らしめんとを欲し、政治は、一個人の幸福を成るべく圓滿十分ならしめ、社會の最大多數に最大多數の幸福を得せしめんが爲に、有ゆる害毒を除き有ゆる矛盾を調和し、只專ら民々をして最良の發達を爲し得せしめんとを欲す。故に道德は吾に命じて可成く多く人に與へよ、可成く切に人を利せよ、可成く熱心に人の犠牲となれよと云るに、政治は吾に命じて可成く權利を主張せよ、人を害せずして成可く多く自ら利せよ、人を侵さずして成可く切に自ら幸ひにせよと云ふ。且又道德は人の心裡に立入て未だ爲ざるの行爲を判斷し、事の未だ現われざるに於て賞罰褒貶するも、政治は只形跡あるの行爲に就き、有證據の情事に基づき、結果の何如に關わりて人を賞罰褒貶す。故に政治の人に及ぶ所は全躰の一部分にして、道德は人の全躰全心に關係し來り、道德の人を責むる

は晝夜となく明暗となく表裏となく一刻一際の間だをも容赦するなきに、政治の人を責むるや只だ一國民として一臣下として一隣人として專ぱら其の表面、交際、約束等に係はるの一部分に徹するのみ。　左れば總べての事に於て道德と政治と相異なるにはあらざるとも、亦た決して總べての部分に於て兩々の相同じきとある能わず、例へば三と八との如し、八の中には三と云へるものに似たるの性質あり三の中にも亦た八と云へるものに似たるの一分あらんとは云へども、八と三とは決して同一物にあらざるが如し。　三を八に於て悉とく要むるは大率ね可なり、然れども八は決して三に於て悉とく要む可らずと知らば、吾人は亦た完全なる道德論の擧げて政治論中に於て要む可らざるとを斷念す。

然れども一二三は、一二三四五六七八に至るの一二三なるが如く、三の三たるに於ては八中の三たるに似るものあるを尋常となす。よし政治論中には固より完全なる道德論を適用すると能わずとするも、其の一部分に現われ得たる道德論は亦た彼圓滿なる道德論の一部分と同性質ならざる可らず。つらつら思ふに政治と道德とは其の根底に於て相ひ異なるものに非ず。

夫れ汝ち人を使す勿れと云ふは、人をして先づ人を侵さゞるの人と爲らしむるに若かず。又汝ち自からの權を主張せよと云ふは、人をして先づ人の權を害せざるに至らしむるに若かず。又汝ち尤も能く自から利せよと云ふは、万人をして先づ人を利せんとし万人をして相ひ共に利せんとするに至らしむるに若かず。之を以て政府は其の國民を放任し彼等が罪あるに至つて之を捕らへ只だ人を害するの行爲あるに至つて初めて之を制除するの無爲主義に止まるとなく、先づ或る限りに至るまで國民を敎育し、害を未然に防ぎて利を未だ起らざるに大奬勵するの務めあり、所云る器械的の政治よりして道德界の政治に向ふ一進歩の處置たり、此は昔日に於てプラト、アリストートルが大ひに主張したるのみならず、近世に於てミルが其經濟論中に於ても論述したる所ろなるに、或時は時勢反向し往々此の大義務を無用ともしつるが、最近年歐洲に於ての大勢は再たび「國家敎育」の下に於て大に之を主張する者の如し。特に一國には其國民をして尤も固く協和せしむるの大責任あらんに、人の相ひ和するは其相侵さゞるが故にあらず、其の財産智識の豐富なるが故にあらず、眞に其の道德の熱實にして義に就き國を守るの眞勇極めて熾なるが故にありと知ば、政治は其一國民をして固く結合せしむるが爲に敢て道德的ならざる可らず。又一國には其國民をして成べく多

くの幸福を得せしめんとするの大希望あらんに、大凡そ人の幸ひなるは其の富み驕るが爲にあらず、其の繁榮の華々しきが爲にあらず、只だ眞に隣保相愛し、一家和樂し、上下共に樂しみ、尙は自から省みて疚しきなきの地に至るに在りと知らば、政治は其の一國民をして尤も多福ならしむるの最良手段として亦た道德的ならざる可らず。又一國には其國力を富強にし國權を伸張し國民を雄强にするヿを熱望すらんに、抑そも人の尤も強きは其の莫耶の劒を握り十連發の鋭銃を肩にしたる時にあらで、自から恥ぢず千万人と云へども吾れ往んと云へる良知極明の時にあり、故に國は兵馬軍船あるによりて強からず只だ義人あるによりて強く、饒地多產なるによりて富まず只だ正しき勉力者あるによりて富めりと知らば、政治は其の國を富まし國權を張り國民を雄壯にするの必要によりて亦た先づ道德的ならざる可らざるを知るべし。　切言するに、一國の政治若し道德に合せずんば百の美政其の神を失ふ、一國の民道德によりて支配されずんば百の便利其の効を無にす、吾人は政治が悉とく圓滿なる道德に合し了すべしと思はず、又悉とく之に合せしめんとして施政するの反つて害あるを信ず、然れども其の爲すべき限り許さるゝ限り能ひ得べき限りに於て道德的ならずんばある可らずと言ふ。　政治は總ての道德を爲し了りがたし、然れども一個の不道德を爲す可らず。

然れども人の少年にして力に誇り、壯年にして智に誇り、老年にして遂に德に安んずるが如く、人類の初めに腕力を以て戰ひ、近世に至りて智力を以て爭そひ、將來の黃金世界に於て遂に德を以て相ひ安んずるに至るが如く、一國の政治も亦た當に如此き方向に進步すべし。政治家にして國民の道德を進むるヿに注意せず、政務を道德的に進むるヿに注意せず、漠然として老莊を氣取り、無爲を以て高尙至大の事と念ずるに至りては、未だ能く進化の理法と人類歸着の大方向とを知り得ざるものなり。　惣ての政治は當に實情に適すると共に尙ほ將來の理想を懷くべし、啻に歷史的に據るのみならず併せて當然的に據るべし、啻にアリストートルに從ふのみならず兼てプラトに從ふべし。　抑も蜃氣樓的の政治は固より人世に望む可らずと云へども、理想的政治は豈に到底吾人類が住ふ所ろに實行し能はざるものあらんや、吾々は日に日に德に進まんヿを欲す、吾が同胞の兄弟姉妹は惣べて亦た當に然るべきなり、然るを何すれぞ、吾々と吾々の同胞兄弟姉妹を納るゝ所ろの國政に於て豈に獨り然らずと云はんや。

但し政治と道德とを全く別途に屬するとするも、政治家は純

然たる一個の人間なりと覺悟せざる可らず。彼は織女が機を織る如く農夫が田を耕やすが如く同じく天より其の才力を賜はりて政務を執るの職に就きたるなり、故に機に於けるの術と田に於けるの業との相ひ異なり乍らに彼等が矢張り人間たる如く政治家と云へども決して人間の籍を脱する能わず。故に彼等が人間としての道德は皆一樣に裁制し來る、若し万々一其の間だに等差ありと云はゞ則ち政治家こそ更らに嚴密なる裁制を受くべけれ、田作り男機織る女に較べて平生擢んでてエラ相にせらるゝ丈け其の道德の要求する所ろも亦た非凡なるべし。然るに彼のマキヤベリーが奇狂偏曲なる君主論ありてより以來、百のナポレオン三世は獸慾の我儘を此に於て辨護せられ、揚々として大功は細瑾を顧みずと豪言し、政治上の行爲は其の決果によりて義とせらると云ふ、何等の怪語ぞ。凡そ發達の遲かりし者は道德の進みも亦遲かりしならん、故に國政と云ひ外交と云へるもの、道德の一個人の道德に劣れるあるは勢ひに於て止みがたき理あり。又た直接に接するものは仁心を失ひ難く、間接に交わるものは德性を弱くし易し、故に公共よ立ちて遙かに他に接するの業務は自づからに其の道德を損するの通弊あらん。之を以て國政の取扱ひ、外交の掛引、政治家たるの安心に至りては道德に於て特に大ひに誤まり易きの傾向あるや當然なり、然りと云へども其の之あるが爲めに敢て道德に違背するとを許せと云ふものあらば、天下豈に之に過るの弱丈夫あらじ。政治家は特に敢爲强任の大勇を要す、之を一國に要するの人數の極めて少なき割に其の非凡なる性情を要すると極めて多し、若し政務に當りて敢て正義を確守するの勇なき程ならば寧ろ政治家を止むべし、車引の方遙かに安心ならん、苟しくも一國の大權を托せられ、萬民の惣代となりて、世界萬國の群雄と取引を爲すとき、すでに一個人間たるの德をすら守りがたくんば、呉々も政治家を止むるが善し、吾人は如此き弱い者の決して政治家に適せざるを知ると共に、亦た如此き弱い者の政治家となることを胸臆より嫌惡す、故に重々勸告する也。　然れども此は自から弱くして正義を守りがたきの人物に就て云ふのみ、然るに彼のマキヤベリー等は、政治上の處置は一種異樣の道德によりて取締りせらると論じ、敢て弱きにあらず、寧ろ强しと思ひ利口なりと思ひつゝ姦詐欺僞の政務を爲す、而して如此き行爲も若し其決果の宜しくば得て前日の不德を償ふべしと云ふ也。故に一旦アンチマキアベルを著したるフレデリック大王も、すでに政權を握て自から此の困難渦中に立ち入れば則ち云く、我は慟哭して欺むきを爲す、我は一個人とし

ての信を破りたり、然れども我は國家の爲に欺きたりとの不名譽を受るヿを甘んずと、噫如此きは國家百年の大計の實に國家の大利なるを思はざる也。吾々一個人の關係にても、欺むきは一時の難を救ひ數日の利益を齎らし來るあり、然れども數日にして其の決して眞利益にあらざりしを知る、其の害は引いて十數年に至り、遂に一生の大損害となるヿあらん、故に「正直是最良之政策」とは商人の中にも戰爭の中にも既でに確かめられたり、安んぞ獨り政治上の運動に至つて此の大道德の行はれざるヿあらんや。然り若し一二年の花々しき權力を得るを以て政治上の理想とせば或は如此きヿもあらん、然れども一二年の小刀細工が大政事家の務めなりとは何人も斷言し得まじきなり、ボルテーア嘗て斯る間違ひたる政治家を罵倒して曰く、

如此き寸時彌縫的の政策によりて何事をか爲し得ん、若し何事をか爲し得たりとせば其の政治家の一生涯にも續かざる所の事なり、身未だ死せずして其策すでに死す、嗚呼彼が如き高き價を拂つて斯の如き小さき利を受るは、極愚にあらずやと。

故に吾人は政治家に熱望す、道德に據らざるの政策は決して國家長年の眞利にあらず、一と度び砂の家を造つて砂の繩もて團結するヿも夫れ果た何の益かある、政治家の住ふ官舍白屋は巍々として高し、彼等の地位も亦た殆んど人臣の位を極む、嗚呼汝等の家も地位も共に天に近し、願はくは其の心も亦た天に近からんヿを。

吾人歐米列國の大勢を見るに、其の政治上大に痛歎すべきものあり、其政治上の根底動搖して將に一大變革あらんとするものあり、之を以て誰も彼も大いに掛念して種々に之を論述するもの丶如し、此に於てか、哲學論に於てはカントに反れ(Back to Kant)と大叫するものある如く、政治論に於ては將にアリストートルに(尚亦たプラトに)反れと云ふ者あらんとす、共和政治も試みれば左程善きものにあらず、內閣政治も弊害至つて多く、議院の不德にも厭き果てたり、左ればスペンサーと共に昔日の自由論は君主の權を剝ぐにてありし、將來の自由論は議院の權を剝ぐにてあらんと云ふもの多し。我國も來年は國會が開けると云ふ、國會開けたる曉きは今よりも宜しかるべし、然し今豫想するよりも宜しと云ふヿは殆んど斷念せざる可らず、大凡は何如なる制度を爲るヿも國民が先づ立派ならずば何の効もなし、其の道德にして先づ美ならずんば國民はいつ迄も立派ならじ、吾人は只だ政治界に道德の行はる丶彌よ益す多からんヿ強からんヿ密かならんヿを希

望して止まず。

此に至れば吾人は我が姉妹に思ひ至らざらんとするも得ざるあり、將來社會に道德の空氣を必要すると彌よ切なると共に社會が婦女子を必要すると亦彌よ切なるべし、將來政治に道德の分子を必要すると彌よ切なると共に政治が婦女子を必要すると亦彌よ切なるべし、見よ今の英米の政治社界を見よ、既に業に此の境界に至りつる也、婦女子は既に已に之に應ずるの地位に到着したる也。

世人英米の婦女子が政權を授與されんとするに熱奔するを見て、之れ婦女子が只だ其の天權を恢復せんことを狂望し、恰かも敵打を爲すか、十字軍を起せしかの如くにして奔走する者と誤認する勿れ、蓋し多數なる彼等が中には固より如此きものもあるべし、然れども其の尤も多くが躍立して斯る事に奔走するに至りたるは決して言ふが如き冷淡無味の本懷に出しにはあらず、彼アパルチーン伯爵夫人も言へり、妾等が出でゝ政海に奔走するは自から新なる權利を得んとするにあらず、新たなる義務を負はんが爲め也と。蓋し社會及び政治に於ける道德界の必要は、實に彼等を驅りて其の必要に應ぜんことを請しもの也。　吾人は固たく信ず、女子は決して男子と全く同樣の仕方に於て政治界社會内に奔走すべきものにあらず、只だ其の天稟の美性、道德性、慈善性によりて、出でゝ男子が大忘却大失敗するの地に運動するに在り（參看せよ本號の社說を）、而して政治上に道德の元氣を注入するに於ては特に彼等が專任し擔當せざる可らざるもの也。英國主相サウリスベリー昨年某所に於て演說して云く、

余は女子が議員を撰擧し國の政略を左右することに付て分前を取るの日の甚はだ近づけることを熱信す、余は女子が此等の權利より退けらるゝに何如なる理由あるかを知る能はず、其智識其敎育其品行等に付て言ふに現に撰擧權を有する男子に劣らざるの女子甚はだ多きことは極めて明らか也、而して現今の如く政治をして道德宗敎の方向に傾かしむるの必要甚しき時代に於ては女子がおよぼす所の感化は尤も大切なるもの也。

嗚呼、權謀術數の數治は當に過去るべし、多欲慘酷の政治は當に過去るべし、王の虛榮に動く政治は當に過去るべし、宰相の功名心に築く政治は當に過去るべし、シーザー、ナポレヲン、アレキサンダーの政治は當に過去るべし、蘇秦張儀の政治は當に過去るべし、彈丸に續き鮮血に混じ兵馬に蹴立つるの政治は當に過去るべし、拜金唯物驕奢外飾するの政治は當に過去るべし。　政治の旅行は地より登りて氣界を通ります〱天に近づくにあり、其の人は肉より離れて心情に熱しいよ〱靈性に近づくにあり、其の論理は器械的を去りて國家的に遷り、日々に道德的に進むにある也。　諸君何んぞ利を言わん、先づ仁義あるのみ。



女學雜誌は進歩する者也

現今の日本は合計十三種の女流雜誌を生存せしむ我國の女界は多福ありと云ふべし此間ヌ立ちて其出現したる時の尤も早く其發行する度數の尤も多き者は蓋し我女學雜誌なり而して若し鋭意熱心に女學を研究し女權を擴張し女德を伸達し併せて社會に純潔の空氣を流通せしめ交際に和樂の眞愛を布満せしめ文學に高尙の理想を抽起せしめんとする者あらば女學雜誌は數年一日の如く其驥尾に附かんことを勉めたるもの也故に十有三種の女流雜誌にして我日本に若干の功益ありしとせば我女學雜誌も亦た聖世の恩に万一の義務を盡くしたるもの歟然らば即はち女學雜誌は幸にして他の多くの同性雜誌に伴侶たることを得たるもの也。

但だ夫れ女學雜誌は他の同性雜誌に比較して確かに一個の異れる希望を懷き來れり即はち彼は必らずしも多く我女流社會に讀まれんことを願はずして寧ろ多く男流社會に顧みられんことを望み其辨ずる所ろ勸むる所ろ訴ふる所ろは常に多く此方向に傾むきたり而して世に女流雜誌の出現すると云ふ多きに隨て女學雜誌が此の一希望を實行するの度も亦彌よ進みたり故に常に思へらく彼の專ぱら我親愛する所ろの女流を慰さむるものは他に必らずや其人あらん女學雜誌は敢て其外に一進歩せざる可らずと。

明治十八年八月女學雜誌第一號の出版せられてより若し爾來五年間に於ける吾人が一長路の進歩を顧みるものあらば蓋し右に述懷したる吾人

が希望を承知せらるゝの人あらん而して世に若し如此き知己あらば其人は今や日本國の時勢將に一大變せんとするに當りては女學雜誌も亦之に隨つて一進步せざる可らざるとを承知せらるゝならん實に然り吾人は今に於て此の責任あるとを確認したるもの也。

之を以て女學雜誌は今後更に一進步せんとす即はち其論說記事を新たに政理的社會的外交的にし從來に比較しては更に多く文學的攻擊的結構的主張的新鮮的たらしめんと欲す故に彼の公平に女學の理を探究し神潔に女德の基礎を確立し熱心に女權擴張の方法を主張し周密に女子敎育の方案を運らし以て淑女賢妻良母を養成し保護し運動せしめ以て社會の德を淸くし國家の礎を固くし天下長久の大策を建立せんと欲するに於ては吾人が希望とする所ろ敢て前日に異なるとなしと雖ども但だ其異なる所は今後社會に向て更に廣く打ち出で更に深く切入り更らに明白に男流諸氏が目前に立現わるゝに在り而して望む所ろの大極は即はち人類の自由を眞正にし公義淸德の大道を發揮し萬國を無爭の一家と爲し男女同等上下一致國家和樂天下太平の眞樂地に到らんとするに在り故に若し宇宙に坤道あり社會に女粹あり文學に陰德あり交際に和性ありと云はゞ女學雜誌は此の坤道女粹陰德和性の一門よりして敢て大天地を見るのみ豈に自から中正の旨義を得ると云はんや希ふ所ろは一臂を捧げて坤輿を大中至正の道に進むるの勞ゝ加はらんとする耳。

此故に當五月四日出版の雜誌即はち本誌第百六十號よりして面目を一轉化し其後時勢の必要に應じて着々進步すべし就中雜誌に時論時事の兩欄を加ふる事批評傳記雜錄等の欄內に惣て女學以外の記事を合せ掲ぐる事紙數に增加ある事圖書の精鮮となる事社員に三名の增加ある事而して定價の元の如く配達の更に迅速となる事等は先づ第一着手する所の小進步なり其他に叙々として進步すべき所の細事に至ては願くは本月以後の雜誌紙面に就て見よ。

如此く改進したるに付ては本誌に通信女學を附するの不適當なるを感じ乍殘念全く之を除き更に再び前日の躰に復するとに定む故に異日更めて別卷として通信女學を發兌するの仕組を立つべし。

時論の附錄は時の必要に隨つて加はふる者なれは其の掲載度數は不定なれども大概月に一回以上に登るとを期す。

以上の改進に付き左の三事を廣告す、

今後女學雜誌は如何なる種類の書籍をも公平に批評するに付万種の新著作を寄贈せられたき事

特に寄書の多からんとを望む而して說の非凡着實に文の極めて簡短高潔なるものを望む事

餘興の材料たるべき落語(淸き)、ナゾ(潔ぎよき)、隱縮(鄙なき)、考へ物(面白き)、等の寄送を熱望する事。

社說

○日本女流の進歩、

日本「女學雜誌」の進化。

一晝夜は二十四時より成り、一時は六十分より成り、一分は六十秒より成る、柱時計を見れば秒の針は吾が脈鼓に連れて刻み進み、分の長針は鷹揚として緩やかに歩ゆむ、然れども彼の短針に至つては直ちに其進む所を見ず、恰かも固定して白地に墨引したる如くなるに、此の動かずと見えたるは即はち其の大ひに動きつゝありしにて、一時間にして彼の針は既でに一區畫を渡れり、此に於てか鏘然として時鐘鳴る。眼こを擧げて則はち時を知り、云く何時となれりと。然れども人あり若し、此の時鐘の鳴りし時に至りて頓に一時間を進みたりと云ふものあらば何如ん、一時間は此の音の聞えし時に於て進みたるにあらず刻々として間斷なく進みたりしなり、秒は八萬六千四百に達し、分は一千四百四十に達し、時は二十四に達して、而して後ち一晝夜二十四回の鳴鐘を聞く也。時勢變轉の鐘を聞く亦た如此し。

日本女流の形跡を考がうるに、進歩の跡歷々として明らかなり、而して其進歩は啻に今日迄でに著じるしかりしのみにあらで、其の後來に於けるの望みも亦た確然として極めて固たきを覺ゆ。　若し日本三十年の文明を以て、古今東西に絶類の進歩を遂げ得たる者とすれば、特に日本五年來の女流の發達は更らに尚ほ絶類の進歩を爲したりしものと認めざるを得ず、試みに女子教育の程度の何如に進みしか、女性に對する感覺の何如に改まりしか、女流彼自身の何如に進歩せしかを見よ、過去の經歷に因りて將來を推せば、吾黨の希望ほどに堅固爽快なるものはあらじ。　女學雜誌は好し此の運動に先だつことを得ざるとも、切めては此運動に後れざることを矢うべし、夫れ苟くも之に伴なつて同行進歩せんことを欲せば女學雜誌も亦た如此くに進まずんばある可らず、女學雜誌は果して今の女流の進歩に伴はれ存するや、幸わひにして若し然りとせば彼も亦た五年來絶類の進歩を爲しつるなり。　吁將來の日本女流は當に何如に進むべき乎、吾人固より之を知らず、然りと雖ども只吾人が夙夜に熱望して止まざる所ろのものは敢て之に同行せんとするに在り、假令ひ之に先だち得ざるとも決して一歩だも後れざるに在り、極めて密切に之と同行せんとするに在り。　故に日々、月々、年々、號を重ねて間斷なく進歩すると、而も頓忽急激ならず只だ着實徐々に進化すると、

是れ女學雜誌平生の覺悟たり。

つら〳〵思ふに日本女流將來の進步は、得て其の方向の一端を窺がひ難きにあらず、蓋し其の方向は假りに容易く到り得べきの路頭にあらずとするも、當に必らず其處ろに到らしめざる可らざるの方向なりとす。　之を以て例證を歐米に於ける先進の女流に取り、本義を女性元來の天稟天權に定め、密かに他の總ての文明開進に參考しつゝ、遙に前途を望めば、日本女流將來の進步は明らかに其の方向を示すあり。

天は人の上に人を置かず、均しく皆な大地球の上に獨立するなり、故に社會組織の治安によりて或は王侯將相となり、或は匹夫賤婦人となると云へども、若し夫れ其の一個人間たるの價値に就て之を云はゞ男女四民皆な同等ならざる可らず。彼の法律の公平、人權の伸張、を初めとして、政治經濟文學商業に至るまで悉とく平民主義の通理たるとを證するものは、豈夫れ天の下に於て「万界是れ平民同等の大眞理たるとを證する」ものにあらずや。　すでに平民主義にして其眞理たるを知らば男女同等の均しく亦た眞理あるは大陽を見るよりも明らか也。　然らば日本の女流も遂に男子と同等の地に立つに至るべし。

然れども同等は必らずしも同職にあらず、既に同職にあらざれば社會がそれ〳〵の職に隨つて與ふるの權利名譽も亦た同一にあらず。手は手の用を爲し、足は足の用を爲す、手は步まざるに由りて卑しからず、足は執らざるに由りて下賤ならず、其職固より異ると云へども人躰に於ては必らず同等の尊位あるべし。左れども人躰に於ての同等は必らずしも社會に於ての同等にあらず、手は王侯に握手すべし然れども足を擧げて之を衝かば無禮の極とならん、足は靴を穿つべし然れども手を以て之を提さぐれば大宴に臨むとを得ず、但だ夫れ手足ともに同等にして手は足に向つて濫りに之を撲つとを得ずと云へども、然れども公開の席上に於て社會の禮式の假定する所ろは自づから確定す、人世の治安を大切にするものは決して之を滅却す可べからざる也。　すでに同等にして職を異にすれば、社會が異職の人に向つて與ふるの權力は亦隨つて異ならざる可らず、政治上社會上に於て男女を同權なりとするは現世の許す所ろにあらじ。　然らば日本の女流も、遂に男子と政治上異權の地に立ざるを得ざるに至るべし。既に到底同權にあらずとするもその同權ならざるとの必らず今日の如くあるべしと思ふは極めて非也。凡そ政治上の權に

就て之を云はゞ啻に男女の到底同權ならざる耳ならず、總ての男子も亦た互ひに到底の不同權ならざる可らず。　然りと雖ども吾人が所云る男女の不同權あるものは、敢て人爲を以て男女の職を制限し、汝ぢの境界は此迄で也と區域して而して之に當るの政權を暴斷するが如きの謂にあらず。抑そも男女は天來の異性を具するものなるが故に、若し之を自然に放任して其の各自の適する所ろに往かしめなば、恰かも彼の夫婦が自づからにして業を分つ如くに、彼等が社會上政治上に於けるの運動も亦た現然として相ひ分るべしと思へり、而して此の相ひ分れたるものゝ上に授けらるゝ政治上の權力は必らずや亦判然として相異別せらるゝに至らんと信ず、政治上に於ける男女が到底異權たるべしと云ふものは即はち此の謂ひ也。　然らば今日に切要する所ろの者は、彼の人爲の制限を打破するにあり、特に强が弱を壓し先進が後進を抑ゆるの情念に發するの制限を悉とく打破するにあり、男女を再たび悠々たるエデンの古樂園に召戻し、更に改めて彼等をして其の自適する所ろに出で行かしめ、以て天與の本性をして各々其の爛熳たる光華を煥發せしむるに在り。　故に日本の女流は益々自由界に泳出し、能く其の本性に隨つて天命の責任を盡し得るの地に進まざる可らず。

思ふに男子は陽にして女子は陰にてあるべし、男子の務めは外にして女子の務めは内にてあるべし、男子は自然に雄武にして女子は自づから文雅にてあるべし、如此き天性の異別は何如にすとも決して滅せざる可し。　既に何如にすとも滅せざるを知らば特更らに心配するを要せず、之を戰場に置くも慈悲深きものは常に慈悲に厚く、之を劇世界に入るゝも優しき者は常に優しく、之を大競爭の地に置くも細かきものは常に細事に注意すべし。　故に一家に於ても妻の仕事の夫の役口に異なる如く、一國に於ても女性の運動は男子の盡力に異なるべし。　學者云く一國は猶ほ一家の如し、一國の務は猶ほ一家の務めの如しと、然らば何の故に家を理むるの細君は亦出でゝ一國の理治に關するを得ざる乎、彼等は一家に於て既に男子と分勞したり、一國に出でたるが故に何を以て特更に此分勞を放擲せんや。　社會清德の事、慈善教育の事、文學美術の事、政務中の尤も親切細心を要するの事、大凡そ此等は特に女流に適して男性に不長所たる所なり、故に女子が一家に於て既に此類の業を擔當するが如く、○他日亦出でゝ社會公共中の此類の業を擔當するは至善至當の理にあらずや。　但夫

れ此處に至り得るは女性自身の實力大ひに發達したるのちにあるべし、日本の男子は明年に於て初めて國會あるものを開くとを得、彼等たとひ國會あるの權利を所有すと云へども其の實力に相應するの時機に到着せずんば則はち之を開きがたし、如此く女流も亦た其の當に出で得べしとの權利は則はち直ちに之を社會に出し得るものにあらず、未だ其の實力の十分なるに至らずんば社會は決して其の出で來るとを許さず。此故に女流が社會に立出て、政治に關係するは、其の事自身に於て決して不正危險のものにあらず、但だ若し時の未だ許さゞるに於て早く之を許さば、恰かも之れ無知の男子に國會を與へたる如く、猿猴に正宗の名劒を授けたるが如くならん、其の之に危險あらんとは敢て彼等が女性たるの故にあらず、只だ其の時の未だ到らざりしに由る也。然らば日本の女流は到底更に社會に立出で遂に政治に關與するに至るべし、今日は固より不可なり、然れども到底那地に達すると知らば、則はち之を今日より準備せざる可らず。

然るに息子を倘若しと云ふものは息子にあらずして常に老親にあり、國會を倘早しと云ふものは人民にあらずして常に政府にあり、大凡そ先進したるものは後進を輕んずるの弊に陷いり易く、後進のものは先進者が未だ知らざるに既に自己の力量を悟るに鋭敏なり。故に官が民を卑しみ、先生が子弟を輕んじ、老親が息子を子供視するの弊の常に存するとを知らば、男子が女性を輕んじ卑しみ子供視するの弊の亦た常に存するとを承知すべし。此に於てか大怒するものあり、剛慢者の鼻を折き、氣儘者の心を挫しぎ、意張る者の勝手を壓へ付け、純乎として人類の自由を主張し、平民的に荷擔し、正義に泣き、天國の至愛公平を傳通するものあるべし。故に日本の女流は將來に於て益す多く此流の義人を切要し、懇望し、若くは養成助力することに於て彌よ強く進歩せざる可らず。

此に於てか女子教育の程度も亦た日々に進歩せざる可らざるを知る、彼の女子高等教育の可否を論ずるが如きは殆んど兒戯に類す、總ての教育は出來べき限り能ひ得べき限り尤も高等ならざる可らず、特に女流は常に劣等の段に居るの地よりして進化し可成く速かに男子に同伴さるゝに至らんとを欲する者なるが故に、其の教育も亦た成べき限りに高等ならざる可からず。然れども教育には智德躰を兼備するを要し、彼の身躰を傷めしむるの教育の如きは固より之れ完全の教育にあ

一二

らざる勿論なるが故に、其の智を曲げしめず、其の徳を破らしめず、其躰を傷めしめず、能く三者を兼ね發達するの方向に於て、毫も遲怠なく、出來べき限り能ひ得べき限り、高等の教育を實行せざる可らず。　然らば日本將來の女子は日に新に日々に新に彌よ新たに進歩して其高等の教育を受けざる可らず、主張せざる可らず、授與せざる可らず。

以上の尤も必要なる諸大事は、啻に必らず左樣にあらざる可らずと云ふのみにあらず、實に必らず左樣にてあるべしと信望せらるゝもの也。　目的既に懸れり、吾黨は之れ進むものにして亦た之に進まざる可らざるもの也、左らば一日も間斷なく之に向つて進行せざる可らず、而して一日も間斷なく進行せば吾黨進化の跡は亦た一日も間斷なかるべし。

果して然らば、女學雜誌は日々に進化し、月々に進化し、年々に進化し、其の號々に於て、其の毎紙片に於て、常に進化すべし、何すれぞ特更に第何號に至りて大ひに改まると云ふものあらんや。然りと雖ども秒の瞬々に止まず、分の刻々に止まず、時の即はち如此くにして進むにも係らず、鐘は只だ一時間毎に快ちよく鳴るなり。　今日眼を放つて日本社會の大勢を鳥觀せば、夜の暗黑はすでに過去り、二月十一日を以て曉きの鐘は轟然として鳴りつるぞ、春色すでに半ばを去り櫻花早く落謝したれど、日本の社會は今やいよ〳〵天明ならんとす、鷄の鳴ける聞ゆ、朝霧の散じ行く見ゆ、旭光正に破れ出でゝ万景被衣を脱せんとは爲す。　未だ正朝の八點鐘を聞かず、未た太陽すでに快然登り了り四面新鮮に爽活に安靜に化し來るを見ずと云へども。　然れども今まや人々正に清面整衣するの時刻なり。

女學雜誌は此に於てか亦た一轉化の路頭に到着したりと確認し、即はち本號を以て假りに新路に上るの初歩とは爲しぬ、讀者若し本誌の大ひに改まらざるとを見ば、之れ前號と相距る只だ七日なるのゆえ也、七日の間隙は固より大進化を現すとを得まじ、若し夫れ遠からざるに全野悉とく白くなれるを認ため得たらん日、顧みて本日の本號を思へ、一脈の新流浩々洋々として來り、乍まち此處に至りて一大曲したるとを承知すべし。

日本帝國の慈仁淑德なる吾等が　皇后陛下嘗て詠じて云ひ玉はく

時計の針の、たえまなく、めぐるがごとく、時のまの、日かげをしみて、はげみなば、いかなるわざか、ならざらむ。

論說

○貴族發達進化の大則　加藤弘之

左は去月華族同方會に於て加藤氏が演述せられたるものゝ大意筆記なり、今ま同會の惠賜を請て之を揭ぐ。

余は本日貴族發達進化の大則を演述せむことを約せり然るに過日來強き風邪に罹り未だ全癒に至らず爲めに發音の自由ならざるのみならず草稿の準備も果す能はず順序次第を誤らざらむが爲め遂に目錄樣のものを記せるのみ故に十分の演述は期すべからざれば豫め之を恕せられむとを請ふ。

天則の解は天則と云へる雜誌に揭げたれども未だ之を讀まれざる諸君は其意味分明ならざるべければ最初先づ之を述べむ

天則とは天然の法則と云ふ西洋語を飜譯したるものなり凡そ有形と無形とを問はず天地間に發生する事物は必ず天然の法則ありて其天則は宇宙到處に充滿し毫も誤るとあらず例へは風雨雷震等其他總ての事物皆天則によりて生滅消長せざるはなし蓋し此天則萬古に渉り決して變ずる所なきものなり而して此社會の天則を研窮するものを社會學と謂ふ但し有形界のもの即ち動植物の生滅消長若くは風雨雷震等は實際之を試驗するを得るが故に學者間の異論殆ど絶へ風は此の如く雨は斯々電氣は云々なりと皆既に分明なるに至れり然れとも社會は純然たる動物にあらざるを以て之れが實驗を施すと甚だ難ければ其天則は彼の有形界のものゝ如く分明に確認する能はざるなり之を要するに天則とは天然自然の法則なりと知るへし」社會の生滅消長に於る天則あれば社會中に於ける貴族の發達にも亦天則ありて日本も支那も將た何の國に於ても大體上決して異なるとなきものなり發現上多少の差異なきにあらざるも此は是れ其國の有樣其人民の性質に原由するものにして猶ほ草木生長の理は洋の東西を問ず同一なるも氣候地質等の異なるより生長の程度差違あるがごとし日本の如き温暖の土に於ては十分に生長するも歐洲の寒地に在ては發育せざるものあるも大體上の原理は異なるものにあらざるなり今余は貴族の事に付社會學上の考察を以て多少の證據を引き其各國同一なるとを述べむとす。

動植物世界即ち生物世界には生存の競爭なるとあり各身の生存上互に相競ひ他を倒して自ら勝むとするの爭にして其競爭たる悉く有心なるにあらず草木の如きは固より心あるにあらずして自然に競爭するものあり而して何れが勝ち何れが敗るゝかと云へば強優者勝ちて劣弱者敗る其強優者中に於ては又最強優者勝を占漸次此の如くして進化するが故に今日の

如き上等の動植物を生ぜるなり人間社會にも亦此生存の競爭ありて同く强優者勝ち劣弱者敗るゝものとす。

人間社會の强優者は重もに貴族なり社會の强優者貴族と爲りたるものなり何の國も何の時も社會は强優者に於て支配す夫の法理學開けてより同權の事を論ずるあるも米國の如き國柄に在てすら尙ほ强優者の支配する原則は決して動かすべからず況や他國に於てをや貴族の發生は實に此理に由るものにして其發現の上に於て稍や異なる所なきにあらざるも大體に於ては皆相同じ請ふ進で此大體の理を述べ以て上來陳述せる理由を明にせむ。

歐洲學者が如何にして社會發達の大則を研究せしやと云へば從來開明國に就てのみ吟味せしも近時未開の人種をも詳査するに至れり而して未開人種に於ける材料を對照するに皆悉く同轍にして國に由て異ならざるを明なるを得たり今彼等の研究せし所に據れば野蠻には尊卑の別なく治者被治者の差なきも一歩進みたる世界を見れば稍や治者被治者貴族平民等の差別生ず而して更に進步せるものは其差別嚴然として又犯すべからざるに至る其門閥の地位は殆ど別種族の如くにして大然の階級として口碑に傳はるを常とす英語之を（カースト）と謂ふ天然に定まりたる種族の意あり故に其分界は決して擾るべからずして職業の區別あるものたり之を貴族發達の第一段となす其盛なる實例は印度にあり印度は人民の階級四段ありて第一僧第二武士第三農工商第四使役民の四とす此四段の階級は天然に定まり元と神意に出でたるものなれば決して擾るを得べからずとせり僧は宗教學問武士は政治軍事農工商は農工商輩等其職業嚴然區別ありて敢て逆ふを得ず各級の婚姻は勿論交際も通常之を絶てり其次は埃及國にして開化の度是等の地位に在るものは皆然らざるはなし之を要するに其嚴重なる階級は天然に成り人爲を以て變ずべからざるものとす支那にも必之ありしならむ然れども其典籍の上に於ては詳にするを得ず日本に於ては果して之有りき尸即ち是なり臣、連、伴造、國造、伴部等天皇之を賜ふものもあれば悉く天然とは謂ふべからざるも職業一定して且世襲とし其區別甚嚴なり只日本のカーストは印度埃及の如く嚴格ならざりしのみ其後推古孝德の朝支那の制度を用ふるに及び百般の職制等一變し尸の權大に衰へ全く絶滅するには至らざりしも空位を存するのみとなれり降て天武天皇の時に至り八等の尸を置かる此は今日公侯伯子男の如きものにして是に至て日本のカース

トは全く絕へたり然れども又其後藤原氏政權を執るに及び職業ハ身分に附帶して一定世襲のものと爲り其分界ハ人爲を以て變ずべからざるが如くなりし是れ更に一のカーストを生ぜるものにして先に尸を廢せしや日本の進步未だ其度に達せざりしを以て又新に尸を生ぜしものなるべし歐洲に於ても亦カーストありき只日本と同く基礎の鞏固なる印度の如くならざりしのみ即ち希臘羅馬等ハ二千年前の古に在て貴族平民の差別ハ殆ど別個の人種の集合せるものなりき社會學者の說に據れば門閥の差別ハ元と人種の差別に基くものにして一團の人民他の人種を制服するときハ乃ち貴族と爲り其制服せられたる者平民と爲ると云へり即ち外より侵入したる者勝ち從來存在せし者敗れ茲に門閥の等差生ずるなり而して貴族ハ多くハ僧侶學者等より成る僧侶學者ハ有識者にして有識者ハ社會の强優者なればなり又僧侶學者にあらざれば武士なるもの貴族と爲る是亦社會の强優者にして夫の農工商等の賤業を爲すものハ皆之に制せらる要するに社會を制する强優者が貴族と爲るものたり。

然れども天然門閥の差別ハ永久に繼續するものにあらず何の國に於ても久しからずして變ず今日尙ほ變ぜざるもの獨り印度なるのみ其他に於てハ尊卑の別ありと雖も歷史上功勞あり又其人の有力なるが爲め貴族と爲りしものにして貴族にあらざるものハ功勞なく又ハ有力ならざるに原因するものなり貴族たり貴族たらざるの理由歷史上に既に明なるときハ其門閥ハ最早カーストにあらずして人爲を以て變更し得べきものなり日本に於てハ藤原氏の時までカースト即ち尸の如き性質の門閥存せしに中古源平氏起るに及び全く廢絕に歸し爾來權力を有するハ尸に依るにあらずして其力に基けり是れ歷史上歷然として明なる所にして源平の先ハ王孫なるも久しく民間に在りて藤原氏の盛時に當てハ聊か門地を有せざりしなり其藤原氏を壓倒して眞箇の貴族の地位を占めしハ一に實力に由らざるハなし以後近世に至る迄の貴族ハ皆其實力に由るものにしてカーストとハ大に異なる所あるものなり即ち貴族の地位ハ天然固定のものにあらずして一個の平民も實力あるときハ貴族即ち强優者と爲るを得べきと理義判明なるに至れり之を貴族發達の第二段と爲す。

歐洲に於てもカーストの性質ハ封建時代には全く變化せり英國の封建貴族即ちロルドの權ハ甚だ强きを得ずして王權頗大なりし獨佛ハ封建貴族の權强大なりしも佛ハ中途にして國王

の權力盛大を致し獨は貴族の權益强く其結果ハ佛ハ王室貴族と爲り獨ハ分裂割據するに至れり而して今日に在て貴族たるの價値を有するものは英國の貴族に止まるが如し英國は五六百年前王權强大を極め徵稅賦金甚繁ありしが爲め貴族評議して國王に誓約を爲さしめたり所謂マグナカルタ是れなり今日は上院廢すべし貴族は無要物なりとの說起るあるも英國の貴族は依然として猶實力を有す之に反し他邦の貴族は皆其價直なく獨逸は殊に甚しきものゝ如し其敎育は甚だ高からず人民との交際も英の如く滑ならず故に某學士は之を評して曰く英國貴族は猶ほ新鮮なる水のごとく獨逸貴族は汚水のごとし英國貴族は長子相續の法なるが故に次男以下は皆平民と爲り且平民の功勞ある者を擧げて新貴族と爲す等新陳更代の趣ありて恰も水の疏通新鮮なるが如く獨逸に於ては次男以下の平民と爲るなく平民より貴族に擧げらるゝ者少なく古に在ては勿論今日に於ても猶平民と婚姻すると少なくして陳滯閉塞腐敗せる水と一般なり云々と其他佛國貴族の如きは有名無實に過ぎず中には人物あるなるべきも貴族として國家の爲めに盡すとは毫も之あらざるなり。

右の說述は天然の貴族亡びて實力の貴族起りたるの事に係れり天然の貴族も固より實力に依りしなるべく畢竟二者の異なる所は之を唱ふるの上に存し第一を天然定まりたるものと云ひ第二を實力を以て成れるものと云ふのみ今又第三に屬する貴族あり貴族の名稱なき貴族是れなり。

中等門地即ち平民の中部以上に在りて資財と智識を有するものは貴族の名稱なき貴族なり何となれば彼等は社會を制する强優者なればなり上に僧侶貴族あり下に小民あるを以て中等門地と謂ふ而して何人か此種の貴族にして其貴族の範圍は何の程度に在るかは之を明示し得べからずと雖も概して中等の人民を指すものなり凡そ今日一國の輿論なるものは中等門地より生ずるものたり若し輿論は社會を制すとの言をして誤なからしめば中等門地は社會を制するものなり既に社會を制する以上は無名有實の貴族と謂はざるを得ず普通の貴族は人爵の貴族にして中等門地は天爵の貴族なり往日の貴族は天然と實力とに由り貴族の名稱を得たるものにして即ち第二の貴族の如きは日本も歐洲も（支那は別なり）皆武力に依る武門貴族なり日本に於ては堂上方を除くの外今日に於ける貴族の大部分は武力の强優者なり武力の貴族なり然るに第三のもの即ち無名貴族は智力と經濟的の力とを以て生ずるものにして其

力は之を第二の者に比すれば甚强大に殆ど無盡藏とも謂べきなり武門の權は重もに土地より生ず土地は限あるも智力と經濟的の力とは限界あるとなきなり歐洲の現况を觀よ社會の輿論は中等門地より生じ此輿論を以て社會を制せり日本の中等門地は未だ盛なるに至らずと雖開化の進度に從ひ亦同一の結果を見ずむばあらず此の如きもの生ずるは國家發達の上に於て必要缺くべからざるものなればなり今日の貴族法律上に於ては他に强優者なしと雖國家の發達と共に無名の貴族生ずるが故に現在の貴族は大に省みる所なかる可らず今の現况を以て觀れば素より憂ふるに足らざるべきも夫の獨佛貴族の如く平民と離隔せずして英國の貴族の如く平民と共に事を爲さんとを希望す固より野卑なれと云ふにあらず歐洲中等門地の如き敢て野ならず卑ならざるあり有名貴族も無名貴族も國家の爲めに有益なるは共に異なることなし但有名貴族は法律上國家の優待を受くるの差あるのみ法律上と社會の實際とは自ら差異あるものなれば日本貴族は二者を併有し有名貴族の資格を有しながら更に進んで無名貴族の力を得んことを望むなり即ち無名貴族と共同して高等なる事業を爲し以て社會を制する强優者たらざる可らず制すと云へば私に涉るが如くなれども決して然るにあらず昔も今も將た將來も社會は必ず强優者の在るありて之が制を受けざれは存立する能はざるものなり諸君請ふ獨佛貴族たらずして英國貴族たれ。

終に臨て以上の要旨を約言すれば貴族の進化は大別して三と爲す第一天然貴族第二武力貴族第三智識經濟的の貴族此三段の變遷は國に依り小差なきにあらざるべきも大體上異なるとなしと云ふにあり。

○余は云はん日本の姉妹ありと　　中島俊子

人間が萬能者たる能はざるは素よりなり學者にして殖産家を兼ね殖産家にして政治家を兼ね政治家にして工藝家を兼ぬる如きは太だ易き事にあらざるなり彼陬地僻村田舍にありては隨分呉服太物、米、味噌、油、元結、紙、墨を一己にて兼賣し名を荒物屋と稱するものもあれど都會にありてはヤサカ呉服を買ふの店に於て味噌を求め米を注問すると共に炭薪木を命ずる能はず亦た往日にありてハ葬式を取扱ふ墨染の坊樣が子の曰くを敎ゆる於師匠樣を兼ね得し如く未開の世に於ては政治法律殖産興業を一手に引受るとも出來しならんが今日の如漸く文明めきては各專門ありて己が好適所の一隅を守つて立派に門表を出す事といなりたり是を以て學者は學者を以て名

譽を博せんと欲し政治家は政治家を以て勢力を得んと欲し殖產興業家皆然り其の務むべきを務め勵むべきを勵む固より當然の事あり然れども唯單に名譽を博し勢力を得んと欲るのみにありて他を顧みざる時は其結果甚し好みす可からざるものあらんか甲者甲者の勢力を得んが爲には甲者の黨自ら生ぜり乙者乙者の勢力を得んが爲めには乙者の黨自ら生ぜり甲者に與みせず乙者に與みせざるものは即甲乙共に與みせざるの一黨派亦興れり其與みする者と與みせざる者とは團子屋に入るものと酒屋に入るものとの類のみ各其好みに任すより外手段なきあり甲者己れが勢力を得んが爲めには勢乙者に敵せざるを得ず乙者己れが威力を張らん爲めには勢乙者に敵せざるを得ざれば是亦當然の事なるが故を以て力のあらん限り勢の許す限り鋒を鬪はす何の不可かあらん左れば各其第一要點を定めずんばある可からず其第一要點を超ゆる可からざるなり諸氏は何の爲めに政治家たるか何の爲めに殖產を望むか何の爲めに興業を希ふか恐くは是悉く我が國家の進步を計るの材料と爲さんずるの外無かる可しと信ず諸氏が名譽を得らるゝと共に勢力を得らるゝと共に國家進步を計るの材料と爲るを得ば國家の爲に賀するなり諸氏の爲めに賀するなり抑も諸氏が社會の初陣に出でらるゝ前にありては必ず可愛らしき心情を以て初陣の支度に取掛られしに相違なかるべし即國家を愛するの他意なかりしならん然れども出陣後餘りの激戰の爲めに動もすれば腦熱し眼眩し其根本地を忘却し一時の勝を占めん爲めには暴論無禮は愚か演說會の歸路川に投込むも宜し懇親會上杯盤を以て其頭部を打合ふ如きは極てお手和らかの療治なりなど車丁博徒の紛擾を紳士の集會に迄持出す場合とは成來れり漸文明の今日に至りて尙此の如きあるは宛も白晝百鬼無遠慮に出沒するの思なからずや甲者と乙者と相容れざるは甲者初めより乙者に怨みあるものに非ず乙者初めより甲者に怨みあるものに非るや必せり其相容れざるは其信ずる處共に異なればなり甲者は乙者の信ずる處を以て國家の爲めに不利なりと考へ乙者は甲者の信ずる處を以て國家の爲めに不利なりと考ふるなり果して孰れが是にして孰れが非なるかを知る能はずと雖も其腦髓を解剖し來れば齊しく國家に對ての親切者たる事は疑ふ可からず然らば飽迄卑劣の手段を離れ眞實の地に運動を取らるゝとも疑ひあらざるなり余が望む所は諸氏が既に有せらるゝ眞實に今一層の熱度を增加して尤も末なる尤も餘波なる一己の名譽一己の勢力を得んとに眩まさる

ゝとなく何迄も諸氏が初めに思立れし國家に對して可愛らしき親切者となり吾々をして逸足でなく除々に好乾坤に進ましむるの案內者保護者と爲られんとを望む若萬一案內者保護者の中にも社會演劇の最終には最早一二幕を餘すのみなれば花々しき戰爭は此期にあり爭でか此機を失ふべきかと思ひ給ふ方ありとせんか夫は如何にも氣短かの御方どもにして案內さるゝ吾々は今が漸く忠臣藏兒調べの初舞臺と感ずるの故を以て餘り逸足に歩まれなば吾々の失望云はん方なし此時にありて醉者を醒めしめ狂者を靜め善人を善人なりと大呼し惡人を惡人なりと判斷し此風塵の天氣に清水を濺ぐものハ乃ち何人の職務なるぞ余は云はん日本の姉妹なりと。

"Grand Secret of Moving others is that the poet be himself moved."

Thomas Carlyle.

詩人他を動かすの大秘訣は自己先づ動くに在り　カライル。

批評

(90)。日本女子進化論　中本一冊二百六十六頁定價五十錢 發賣所東京高輪町 石川保助

河田鏻也氏の著にて、元と是れ氏が「曾て男女同等同權の說を聞き思へらく是れ確乎として動かす可らざるの眞理なりと爾來東西南北に間關して見聞し來れる所は凡そ是れ男尊女卑の陋風惡俗を改め日本社會をして男女同等同權の社會たらしめんと欲し遂に自ら顧みず妄りに此著を作爲して世に公にするに至りし者」と云ふ、左ればにや慷慨熱心の筆力紙面に欝勃として現われ吾人を喜ばすと少なからず。第一章には男女生理的の差異を論じて、女子の體力は固より男子に劣れりと云へども其の容姿は大ひに之に優り且つ男子の得て盡すとを得ざる重大の義務(產子)を盡すによりて差引優劣なしと云ひ。第二章には男女心理的の差異を論じて、男女の智力は今ま著しく異なると云へども此は素と社會の組織の不完全なるより生じたるの結果なれば後來其の次第に完全に赴くに隨がひ兩性間の差異は漸く減少し遂に消滅するに至るべしと慰さめ。第三章には男女の分業を論じて、男女各その得意とするの業あり故に女子は先づ自活の道を立て然るのち男子に向つて同等同權の理を語れ然らば文明の男子豈に眞理に就くに躊躇せんやと諭し。第四章には女子の政權を論じて、日本の男子にても國會自治の制に不慣なり不適當なり然るに何ぞ修業の爲め之に就かしむる如く女子と云へども亦た先づ導びいて之に政權を沈るに至らしむべしとて極めて痛激に辨論し。第六章には女子の敎育を論じて、之を早急にせず宜

しく着々として進み而して必らず高等に登らしむべしと説き。第七章には女子と基督教とを論じて、彼の佛教儒教回々教等が男女同等同權論に妨害を與ふるは言ふ迄もなし基督教と云へども亦た其の弊あるを免れず即はちクリストに親炙したる最高弟ポウロが言ひし如く聖書には女を以て男に劣るものとせりと云ひ遂に曰く基督教は永久に女子の眞友たるとを得ずとするも今日の如く憐むべき境遇にある女子の爲には復た他に求めて得可らざるの眞友なるに相違なしと。第八章には女子の交際を論じて、女子が一種特別の異能力を抱ひて交際塲裏に馳騁するは社會の爲に甚はだ願はしきとを述べ。第九章には女子の服裝を論じて、女子が只だ男子の愛を引んと欲して服裝するは亦是れ自ら男尊女卑の弊に入るものなりと教へ。第十章には蓄娼妓並に妾を論じて、蓄娼妓は今よりも七分を減じ止を得ざるによりて其三分を殘し且つ取締を嚴重にすべし妾の如きは尤も不必要にして且つ尤も女子の地位を卑くするものなりと歎じ。第十一章には婚姻を論じて、現今の婚姻に男女の年齡の不同なる弊早婚するの弊其他種々壓制もしくは思はざるよりして起るの弊を辨じ。第十二章には夫妻を論じて、妻が夫に對してアナタ又はアンタなる代名詞を用ふれば夫も亦妻に對してオマヘ又はソンタ、テマイ等と云はずしてアナタ又はアンタと云ひ妻が夫の名の語尾にサンなる敬語を用ふれば夫も亦妻の名の語尾ヱサンなる敬語を用ゆべしと云ひ又財産を別にするの法律を定めしめんが爲に先づ一個人主義を立法者の精神に吹込べしと云へり。其論理は之と云ふ新らしき箇條の多きにあらず、而も間ま過激の嫌ひある所ろ少なからざれども、其筆力意志何如にも熱心にて近著の女學書中に多く見ざるの爽快あり。

○楚囚之詩　北村門太郎著

蓋し新躰詩なり。十六章を通讀するに、氣骨、想像、愛思、の三つ共に凡ならず見ゆれども、律詩として評する時は不幸にも敬服する能わず、若し之を歌はんには何如なる調にて歌はんか、吾人は云う此れ詩情ある散文なりと。其の第十三の後半に、

嗚呼蒼天！　なほ其處に鷲は舞ふや？　嗚呼深淵！　なほ其處に魚は躍るや？
春？　秋？　花？　月？　是等のものがまだ存るや？
曾つて我愛と共に逍遥せし。　樂しき野山の影は何如にせし？
摘みし野花？　聽し溪の樂器？　あゝ是等は余の最も親愛せる友なりし？
有る無しの答は無用なり、　常に余が想像には現然たり、
羽あらば歸りたし、も一度、　貧しく平和なる昔のいほり。

○貧兒の教育　安東松二郎著　女學雜誌社發
○群芳新譜　半狂居士著　博文堂發兌

家内禮拜論はカンプリー氏の著なり近時教會禮拜の事は大に盛さなりしが家内禮拜の事≪も行れず是れ日本家族の規則習慣の未だ立たず極めて固鹵なるによりての弊なるが其主因は信徒が之を勉めざるに由る故に此書の如きは宗教界の時弊に切中するものなり特に聖書引用便覽を附錄としたるは大ひに便利なり定價六錢◎編物秘訣は秘訣と云ふよりも寧ろ其の表なりシロットが一見して少しも分らざるは即はち其道の人の是非一本を備へざる可らざるの設なり定價四十錢◎巧鷄功の名は甚はだ巧なるが所說は尤も實着なる實益談なり近時養鷄の事大ひに世人の注目する所ろとなれるに當り兩氏の如き多年之に實驗したる人々の著あるは尤も祝すべし定價三十五錢◎貧兒の教育は本社の發兌なるが故に別に言はず只だ願はくは讀者幸はひに木著者の熱心なる信切を味はひ玉へ定價十五錢◎群芳新譜は評するも厭なり著者を世間に出スヲあるに之を公然に書立るは何如なるとぞ著者自紂して半狂さ云ふ盖し半狂にもあらじ吾人は之を公けにせんさて評するにあらず公けなるに反對せんさして評する也。

＊～～～～～～～～～～～～＊

男小郎に「私は深き絕可らざる愛をあなたに差上升、ナント其情を亦たアナタから申請るとは出來升まいか。

不粹な婦人「宜しう御座い升、別段入用も御座りませんから御返し申しまーやう。

雜録

○万象皆な美あり　しのぶ

我れ哲學論を攻究するに古今の大家各自に異見あり、一々之を味わうに快言ふ可らず、勝てるものは甚はだ高く思ひ、負けたるものは甚たく憫れに持成し、剛腸の人は特立して爭ひ、才子は巧みに之を祖述するなり。最早や諸見に厭果て、庭前に散歩すれば、巖ほは黒く確く立ち、李は清淡に笑ひ、うぐひすは無心に歌ひ、菫々菜は木陰に香へり、何れも皆なそれぐ〜の美ありて安んじて得意なるが、彼等も必竟天地の粹を吸入して各自の性を爲すあり、嗚呼皆な六合界滿美の細結晶、宇宙間仝大幅中の小繪畫。

○良人歸らず　みどり

むかし或る人の歌へるやう、城山の北秋は最と更に物淋し、夜深く人も寢ねて燭しびの暗らき邊りに、美人梭を停めて歎くあり、荒れたる園の草は露にむせび、冷えし月光は生白く照らす、夢にしたふは妾わなるか御身は父を知るまじきに、憶ふ昔し君が去るとき此の見何ほ腹に在り、今日亦たとあきあきに、况して卜筮の占なひは賴むに甲斐なし、嫁ぎてより此の愛らしさを見玉わぬぞ憂き、屢ば聞ける吉報も據どころ幾度び門外に出でし、君に伴なひて抑も幾日の睦言ありしや、鏡に向ひて照さんに力らなし君居まさずば裝ひを何人にか見せん、噫女子の盛時は十年なし。

○小說の歎　ななこ

誰か余を愛する者ぞ多くの人云ふ吾汝を愛すと實に余が履歷を考へみれは時としては金殿奥深き簾の中沈醉の薫りなつかしき文机の上に置れ時としては嚴冬雪降るの日隱居殿の蒲團の側に侍り時としては賤が伏屋の爐邊に處女の枕となりたり

各種の人にかくうとからぬを思へば自惚かは志らねど余は天下に嫌惡せらるゝ者あらで寧ろ愛慕せらるゝ者ならんか而してかく諸君に愛せらるゝは余が爲に幸か不幸か抑〳〵事物は一方より寵遇せらるゝ時は一方より擯斥せらるゝ者ならん顔回と盜跖にいかでひとしく友たるを得ん世は皆聖人にてあらぬ限り惡人にてあらぬ限りは敵なくしてやは住るべき然らば顔回に愛せられて盜跖の敵とならんは余が最も望む所なり何んぞ伴内に戀はるゝとも嬉しき事のあるべき然かるを余は多く廉士に愛せられずして却て色好みの若人に懷はれ傳記は淑女に謗まるゝも余は娼家にうづくまる月夜清潔の卓論を聞く能はずして雨夜に猥褻の物語をきく余が耳はけがされ余が目は眩む余を愛する人の多きほど余は愈よ不快にをちいる余が不運は從來の余が親友たる寫眞師の多くが余を謬りうつせし故に來りし所の結果にていと悲しむべき事なりされど過にし事はいふも甲斐なし是非もなし望はいつも未來にあらん今や漸く余を觀る人も寫す人も一變したり余が黄金時代は將に來らんとす乞ふ余が親友よ願くは余をして社會の不用物とならしむるなく余をして最も高尚なる社會の有益者とならしめよ余が實の姿は淸よくして西施クレオパトラもいかで及ばん棚引はたる紫の雲の内に舞ふ天津乙女の羽衣重ねきたる如くにあるなり余が代表者よ余が寫眞師よ余が爲に忠實なれ決して王照君の美を媚にうつして胡地に遣りし二の舞をして余を不幸に陷しいれしむるなかれ。

○スウ井フト論　　藤の屋主人

ジヨンソン時代の咖啡茶館は文學者の倶樂部にしてアヂソン、ポープ以下の文學盡く集る、而して此間に立て奇問を發し卓落不羈なる群客を驚かせし者はスウ井フト氏なり。學問論盛んなるや忽に「書籍之戰爭」を著はして時人を動かし、宗敎論起るや遽に「ゼ、テール、オブ、エ、タッブ」を著はして僧徒を諷し、一轉して文壇の元首と仰がれし者はスウ井フト氏なり。氏は千六百六十七年十一月三十日を以て生れ千七百四十五年十月十九日を以て歿し、今を去る二百年前なりと雖ども其名は燦爛として文學史に輝き、傑作「ガリバル巡島記」の如きは走卒犬童是を讀まざるはなし。英のセキスピヤ西のサーバンチスは歐羅巴の文學家なりと賞讚せらるれども、多數の歡呼喝采を博せる事は未だ「ガリバル」の上に出でざるなり。それ大聲は俚耳に入らず秀作は俗眼の喜ばざる處にして英國文學者の如き大抵は時に遇ず。ミルトン、ドライデン等

の徒今日に追尊せらるゝも在世の日は輕視蔑如せられしが獨スゥヰフト氏は王侯貴人をして其筆に感服せしむ。其潑墨淋漓たる處萬人皆戰栗す、慚愧す、慷慨す、悲憤す。蓋し諷刺の巧妙なるに到つてはアヂソンも又一歩を讓るが如し。其鋭利直入するや頑陋の人をして猶ほ寒からしむ。「ガリバル」の如き其趣向は希臘のルシアン既に早く是を案じ、其後襲踏する者少からざればスゥヰフトの功とすべからず、縱令「ガリバル」は氣骨あるにもせよ成效せしにもせよ未だ此點を以て賞すべからず。唯眞率ある文に諷刺を寓し滿天下を罵倒せし巧妙に到つては千古無比にして文學者大抵其後に瞠若せざるを得ず

○當時上王公より下僮僕に到る迄スゥヰフトの名に恐怖せしは元より偶然にあらずして、氏の歿せし報知廣がりし時貴婦人骨牌を遊び冷然として「彼の牧師歿せしか……請ふトランプは何ぞや」ト曰ひしも怪しむに足らず。凡そ不幸の人多しと雖どもスゥヰフト氏より不幸なる者はあらじ、才識餘りあれども微祿に安んじ、國會に代議士を畏れしむるの辯あるも僅かに邊土の農民に說敎し、絕世の佳人を愛し且つ愛せられしも終に一生を獨棲に送り、卓絕不羈なる言を吐て鬱憂を洩せしも終身愁雲の中に沈み、殊に最も憐れむべきは此諷刺に富みたる氣骨ある文を作り滿天下を嘲笑罵詈し後代に到り諷誡家の王と呼ばれ當時に在ては王公貴人をして恐怖せしめしにも關はらず一人として氏を敬愛せし者なかりき。實に氏は當時の偉人なりし英國第一の權勢者ありし、上下兩院僧俗を問はずして是を需むるも氏の如き人あらず、古今の著述家を需むるも氏の如き有權者あらず。蓋し氏の筆は瑣末に拘せず叫喚に陷らず叱咤雷電の勢あれば大臣の權勢も又是に追從阿諛し其鼻息を伺ふて事を處するに到る。女王アンの腐敗時代を快罵せしは獨りスゥヰフト氏一人あるのみ、抑も氏をして諷刺に長せしめしもの即ち此腐敗時代か。

氏の傑作は「ガリバル巡島記」及「デール、オブ、エ、タッブ」の二書にして、「ガリバル」の趣向は我が和莊兵衛或は夢想兵衛と仝樣なれども馬琴の如く理屈に陷らず、表面より見れば殆んど神女談一斑にして兒戲の書たるを免かれず、若し夫れ裏面より觀察すれば言々句々盡く諷刺の意を含み、抱腹絕倒する處は凡て痛苦刺擊の文字たり、殊に「ストラルドブラックス」の性質を寫せし一段に到てはサカレーも又其巧妙に驚けり。然れども仝体より評すれば「ガリバル」より「デール」こそ傑作なり。其趣向の奇に到ては寓意小說多しと雖も能く超出

する者あらじ。「ガリバル」は一定の目的もなく漫然天下を諷せしあれども「テール」は畢竟宗教歴史を小說躰にせしものにてピーター、マーチン、ジャックの三兄弟を點出して宗教改革を偶せし手際に到ては誰人も其自在なるに服せざらんや、就中エオリスムを說きてピユーリタンを諷せしは氏が獨得の文字にして摸倣すべからざるものなり。老年に及んで氏が「此書を發せし時の余が才能は如何計りぞ」と嘆ぜしも故あるかな。ハラムはヲベレーにも此作なしと賛稱せり。

ギッボンの自叙傳に曰く「マレット氏の勸に依り初めてスウ井フト及アヂソンの著書を讀む共に字句簡にして奇警なれどもスウ井フトは男子の勇壯を以て勝ちアヂソンは女性の優美を以て飾らる」云々。是ぞスウ井フトの文章を穿ちものにて單純なるが故に讀者概ね味なしと云ひ、粗末なるが故に猥陋なりと罵れども、未だスウ井フトの神髓を窺はざるの言也。實にスウ井フトの文は單純簡傑なり然れども單純にして幾多の思想を包合し、簡傑にして氣骨凜然たるは則ちその推重せらるゝ所以ならずや。是を我國に例ふれば風來の文字に氣骨あるが如く字句に難澁なくして自然の妙味あるは博識を自負する馬琴の比ならんや。然れどもギッボン既に評せし如く男子の勇壯を以て勝つは畢竟疎笨なる爲めにしてジョンソンが「スウ井フトの文は峻阪を登らず深谿に下らず地盤堅き平路を障礙なく走るなり」と云ひしも實相を極めし言にて面白く、有力なりと雖も縱橫錯綜せざれば僅かに半臠を試めて其眞味を知る能はず。殊に「ガリバル」の如き趣向は極て幼稚なるを以て流讀一遍忽に退けて曰く「スウ井フトの文は乾燥なり無味なり趣向は殆んど兒戲に類す」と。嗚呼、スウ井フトの爲に嘆息すべし、兒戲に類するもの必ずしも兒戲ならんや。其眞味を悟らずして朝比奈島めぐり或は桃太郎鬼が島と同視するは嘆ずべき哉。ヒユームがロバートソンに贈る書に曰く「卿がスウ井フトを偏愛するは余の常に笑ふ處なり元より一種の躰なれば是を嘉せざるにあらねど毫も感歎する事能わずスウ井フトの文には調和せる粧飾なし流麗にあらず正確にあらず若し英國文學にして既に野蠻の區域を照したれば此著者の作を古文學の高位に置くべからず」云々。ヒユームの達識にして猶ほ此言を爲す、凡眼の退くるも又宜べなり、然れどもスウ井フトの長處は調和粧飾流麗正確等にあらずして是等は却て其退くる所なりし。譬へば一歩を讓りてスウ井フトの文を陋猥なりとするも、ヂッケンス或はサカレーを卑近と罵と

全く、皮相に泥で其神髓を悟らざるの言なり。蓋しスウ井フトの長ずる處は諷刺にして「ガリパル」其他の著作の推重せらるゝは唯此一點のみ。ジェツフレーは公平に判斷して曰く「世人のスウ井フトの文脉を見るや大に高きに過ぐ氏の文はドライデンの如く熟せずポープ或はアヂソンの如く流麗ならずボーリングブローク侯の如く高傑ならず一ト口に云へば昔時文學者の高尚雅純の質に乏し（中略）然れども若し恢謔と反語を用ひて其憎惡せし者を嘲弄せし巧妙に到ては是を世界に索るに氏と競ふ者なからん云々。サカレーも古今第一の機才家と稱し、マコーレーも最も鋭敏なる浮世の觀察者と目せり。此二人のみならずスコット、ポルテイアを初め名ある文學者——中にも諷刺家は大抵氏が筆才に服し諷刺家の王と推重するは豈偶然ならんや。一度スウ井フト全集を繙けば輕妙にして氣骨ある他に比を需むべからず。唯「ガツパル」と「テール」のみにあらず。嘲弄と諷誡の妙に到ては却て短編の中に存す。殊に反語の使用に縱橫なるは基督教不可廢論或は愛爾蘭幼兒處分法に於て見るべく、嘲弄罵詈に自由なるは千七百八年豫報に於て知るべし。氏は又詩に長ず、之より想像力に乏しく感情的の句なしと雖ども冷笑的に於ては頗る見るべし。ハズリットも氏にして「ガリパル」を著はさずんば詩人の班に列すべしと云ひ、ジヨンソンも盛んに其詩才を稱揚し散文の是を歿するを惜めり。

スウ井フト氏は小學に於て大學に於て既に嘲弄の才を以て聞へ、苟くも意に協はざる事あれば演説論文を以て教授役員を嘲弄す。其セント、パトリックに在るや常に詭辯を奮ふて聽衆を動かし。社會に出で諸文學者と交るに奇問奇答殆んど端睨すべからざらしむ。マコーレーの論ぜし如く失德の政事家背教の僧侶なりと雖も、文學界より評すれば古今隨一の諷誡家にして一言一行凡て諷刺嘲弄ならざるはなし。シーザーがカツシアスを形容せし名句は又スウ井フト氏を形容すべし、曰く

He reads much,
He is a great observer, and he looks
Quite through the deeds of men.—
Seldom be smile, and smile in such a sort,
As if he mock'd himself, and scorned his spirit
That could be moved to smile at anything.

○不注意なる結婚

星野三蔵

男子たるにもせよ女子たるにもせよ結婚の一半程其人一生の幸と不幸とに大關係を有するものはあらざるべし試に人生の幸福を皆な集めたるを十と見よ其夫妻の和樂より生ずるも

のは其六以上にも及ぶべく其他すべての幸福は皆な一纏めにすればとて其四にだに及ばざらん更に之に反して人若し此結婚に於て失敗したりとせんにそれより生ずる一生の不幸はまた正に其他すべての不幸を悉く集め來りて較ぶるも其半ばに及ぶまじかく結婚は人一代禍福の一大原因なれば男女互に擇むものまた宜く非常の注意をこゝに用ゆべきものなりとすさて茲に不注意の結婚より起れる不幸ものゝ一例として譯出するものは名高きハンチングトン夫人の目撃して自ら書きしるせるものにかゝる曰く、

われ今日圖らずもあるいと貧しく憫れに見ゆる一家族を訪ふことゝありしが年の頃は二十より三十までのうちと思はしき病み疲れたる一婦人の實に目も當られぬ有樣にてあるを見たり其傍には二人の小供ありて長あるは一歳半にして幼なるは生れて漸く三ヶ月に及べるのみにて此婦人の夫たる人は酒に呑まるゝなまけ者にて然かも其心根は甚だ鬼々しきものありかゝる次第なれば此婦人の心は破れ思は亂れ其身さへも衰へ果てしかく迄憫れなる有樣に陷れるなりそも〳〵此婦人は……の地に生れたるものにして其娘たりし時は其地牧師何某の教導に屬し信仰の念誠に深かゝりし者なりし然るに不幸にもたゞ不注意なる結婚は忽ち此婦人を驅逐してかゝる淺間敷境遇に陷溺せしめたるなり現に今其住める家は狹く穢き小舍にしてうちには義理ある舅姑も居れば困難の程も一方ならずそれが上に家中皆な身持正しからずして酒に耽りはては口論を引き起して騷動夜半に及ぶことあり、予が其家に至りし時は此婦人と小供の外には姑のみ居たりしが一見して既に其家は生地獄の有樣をあらはしたり傍より之を察すれば此婦人の心情は既に絶望の境に一歩を踏めるものゝ如し偶ま聖書を開きて讀まんとするときは夫か姑は則はち之を妨げて見る事を得ざらしむ、予が去らんとするとき此憫むべき婦人は予に向ひ一夜たりとも貴婦人に伴はれて其家にとゞまらんには如何に幸福あるべきにと聞くも憫れに語りたり云々。

右の物語は不注意なる結婚より來る人生の不幸をよくも示すものなりあはれ世の年若き人たちよ斯くも一生の浮沈幸不幸に關係する尤も大なる結婚の一事に過ちて悔てかへらぬ悲歎の淵に沈み玉ふこと勿れ。

○歌を見て仁不仁を知る

詞花集　　道命法師

たまさかにわが待えたる鶯の初音をあなや人やきくらん。

鶯の初音を深く賞したるは風流なれどそのが好む所をば人にも及ぼさんと思んこそ誠の風雅ならめ法師の歌にしては猶更に思はしからず不仁の心なり。

新千載集　　　　野宮左大臣

此さとにしばしかたらへ時鳥外の初音はけふならずとも。

此歌を實陰公は不仁の歌なりと評し給へり詞花集の歌は不仁の心猶深し。

拾遺集

過ぬるをうらみはてし郭公鳴ゆくかたに人もまつらん。

後拾遺集

身をつめば入もおしまじ秋の月山のあなたに人も待らん。

これらは仁恕の道にかないたるにや。（隣女晤言）

○文學者の不運　　ふ、ち、

簞食瓢飲の顔回を初めとして支那日本共に不運の文學者多く「貧居」の二字を詩題となせしが何れも變らざる事と見へ法王アーバン八世は衰乞零落せし文學者を救はんとて一貧院を建設し之を癇疾院と名けたるもをかし。

音に聞ゆる詩學の開祖ホーマーは古代高名なる乞食にして自作の短歌を唱ひて市に食を乞へりしが其口は麪包よりは寧ろ詩句を以て充てりといふ。狂詩作者プロータスは粉をひきて口を糊しポール、ポーギースは十四回職業を變へたれど何れも失敗して終に餓死せり。彼のタッソーは詩人中の快人なれ・ども友人より一クラウンを借りて月を送りし事あり、其愛情に贈りし短歌に錢なくして燭を買ふ能はず汝が眼光を借て句を作らんの一節あり、又以て其貧を知るべし。「ドンキホテ」の作者サーバンテスは餓死し、カモエレスは養育院に殘年を送りしと云ふ。

佛國にて最も眞摯なる著作者と目せられ清廉の君子と曰はれたるボーゲラは終日閉居して出でず日暮るれば債主の督責を避けんとて夜もすがら逃回りしかば市人より鴟梟の異名を取りたり其一代の履歴中最も面白きは死に臨みて認めたる遺言狀あり、曰く「余が未だ辨償せざるの債主幾多もあるべければ余は此遺言狀を認むる者なり余が死する後願わくは余の死躰を世益の爲外科醫に賣り其價を以て余が負債に向けられよ余は生て辨償する能ずんは死るも其義務を濟さん事を望む」。斯の如く文學者は數奇なりしが前にも増して英國の詩人ほど不幸なるは少なかるべし。ミルトンの今古無比なる失樂園の詩の原稿料は纔に十五磅ありし、無智野蠻の裸躰人種に賣も

是より少き事はヨモ有まじと思る。ジヨンソンの詩人傳は二百ギニーの原稿料なるが書肆の利益は二十五年に五千ギニー餘なりしといふ。ラッシウォルス及ライマーの兩氏は一生を著作に費し後生を益する事大なりしがライマーは頗る困耗して自著を出版する事を得ず自ら筆耕して五十冊を賣りラッシウォルスは負債の爲め獄に入り殘年を慘苦の中に終れり。ゾランガーも其自傳の中に述て曰く「余が著作に苦しみたる其報酬は道路掃除人の給料半分にも當らず」と。ヘンリーアンドリユーの著はしたる「ムアスアルマナック」は販賣高非常にして年々三十四萬に上りたりしが著者の請取りしは僅に年二十五磅に過ぎざりし。其他スペンサー（エドマンド）もアオトウエイもドライデンもバットレルも大抵は饑餓に狂奔して死せりといふ。

嗚呼世に文學者ほど數奇なるものなし、彼等は王侯の富を願はざるも豈饑餓に倒れ貧院に終を潔よしとせん哉。又文學者ほど世に容られざるものなし、彼等は徒らに放言高談するを欲せざれども綿綉の文字俗眼に入らざるを如何。今でこそ寶玉にも替へがたきほど貴重せらるれど其當時に於てはミルトンの詩章もドライデンの詞賦も殆んど冷視せられたり。今でこそ全世界に曠がりて大打つ聲も口にすれども其初め魯敏孫漂流記は投機の爲に出版せられヒユームの歴史は僅かに六七部を賣りたるのみ。されば文學史を繙きてエリサベス女皇時代と云へば文華煥發して詞人逸樂せしものと思はるれど、文學者の困苦悲慘に陷りたるは中々に十九世紀の比にあらず。日本今日の文學界――飽食煖衣の文學者には夢にも見ざる慘苦を彼等は經歴したり。カムデンがチヤーチヤードの碑銘に

Poverty and poetry his tomb doth inclose;
Wherefore, good neighbors, be merry in prose.

と書したるは詩人頭上に加ふる鍼砭にして英國文學者の實境を寫したるものあれども憾を九泉の下に呑むもの豈獨り詩人のみならんや散文の大家と雖ども逸樂安眠して一生を畢りし者殆んど稀なり。曾てトーマスナッシユの自傳を讀んで喟然大息する事久し。其一節に曰く「夙に起き夜半に寢ね寒氣にも滿足し缺乏とも談話すれども余が勞力は盡く亦損失に歸し常に侮辱せらるれども余が苦辛は徹せられず、少しだにも報ぜられず。經營慘澹せし全智の報酬は唯貧窶のみ。思爰に到れば自から星運を責め保護者を怒り筆を嚙み紙を裂き亂暴以て慰さむ。顧みれば世間卑陋の心を抱きて富貴を樂しむもの何ぞ多きや。余は五万磅を持ちたる沓直シを知れり、革鞭を

振ふて馬尾より千仭を算出せし馭者を記臆せり。余は彼等よりも幸に生れざりしや余は彼等よりも能く敎育せられざりしや。然り實に余は最惠を受けたりしに猶ほ乞食に等しきや」云々。噫、是を辭む者誰か其不幸を憐まざらんや。而して其詩を見れば愈々酸鼻に堪へざるものあり。"A Despairing Author"（失望の作者）の一句に曰く

The faulty means that might my pain appease;
Divines and dying men may talk of hell;
But in my heart her several torments dwell.

是を思へば日本今日の文學者ほど幸福なるものはあらじ。聞識該博とは云へ、咄嗟の名作は洛陽の紙價を貴からしむるのみか、潤筆以て大觀萬里の壯遊をなすに到る。ミルトン、ドライデンの徒泉下に在て其伎倆に驚くや否や。

○天文學の辨

理學士　圭一堂主人

今も今とてこゝに自稱天文家あり、さらぬだに物淋しき冬なるを雨さへふりいでぬれば、今宵はしもいかゞあかすべきと空うちながめてかこち顏なる折しも、年若き人々三人打連れて入來りて、かの天文家に向ひて、我等はあすの日曜日に遠き里邊へ出行かむと思ふに天氣のほどいかゞあるらむ心もとなし、先生の占方きかまほしくてまかりきぬといひければ、天文家はしばしうちゑみて又々例の天氣占か、これは御門ちがひにこそ、餅かはむとあらば餅屋へこそはゆけ、予は酒屋になむといひて、なほ高らかに笑ひければ、來ぬる人々皆口をそろへてこはくしき事をものたまふもの哉、先生は自稱天文家とて御名四方に轟きたまふにあらずや、さればこそ我等は千里の道をも遠しとは思はで、ふる雨に濡つゝたどりきつとひまいらせしを、などてかくは人をあざけりたまふらむ、天文家におはせばこそあすの天氣をばとふなれ、外に餅屋もあらぬものゆゑと、うらみきこゆ。さればあり君たちはあながちに理なきにもあらずかし、もとこの爭は君たちの誤にて、天文學者は天氣のことをも知れりとひたぶるに思ふよりぞおこれるとおもむろにさとせば、御ことばをきゝてなほもまどひぬる心地せらる、天文とは天に在りとあらゆるなべてのかざりをまなぶ學にて、日月星辰より風雨雷電にいたるまで、皆この學にもるゝといふ事はあらずときゝぬ。さるをいかなればかくのたまはするぞ、ことわりいかにと一人なじれば、又一人がいふやう、引ごとするもそこがましけれど、もろこしにも古より司天官てふつかさをおきて、日月の蝕、風雨霜雪の事などをつかさどらしめ、西洋にてもこの事ありければこそ、

かのラセラスてふふみにも氣狂ひたる天文家のいできて雨雲の行方を我心のまにまにわかちおこなへりとはいへるなれ。先生のみは門ちがひなりとて我等がとひにもこたへたまはぬのみか、樣々の御あげつらひと人にもよるべきやと、すこし氣色ばみて辭もそゞろにことなりけり。時に天文家はしはぶきのこゑ二ッ三ッ高やかに衿うちつくろひつ、さわやかなる辭にて、いとしづやかにいひけるは、廣き世の中には君たちの如く考へあやまれる人も多きぞかし。されば予に天氣の事をとひし人も少からず、これらの人々はみな天と地とのけぢめをばわきまへしらぬなり。今よりこれをとくべければ、やゝしばらくは忍びてきゝたまへ。今更事あたらしくいふべきにもあらねど、天といふは日月星辰の在所にて、すべてわがすめる地の外の世界をいふ名なり。古は日月星辰も雷電風雨も皆同じ處にあるものと思ひしが故、これらは皆ひとしく天の文なりとして、天文家といへば日月の行めぐり、雨風のふるさまふくけはひをも學びたり。されど君たちがしらるゝが如く、雲電は大氣の中にあり、雨風は雲大氣より起るものにて、大氣はわがすめる地につきそへる物なれば、これは地の文にて天の文にあらず、日月星辰は大氣の外に在りて地にそへるものならず、遠くはなれて地の外の世界にあれば、是こそはまことの天の文なれ。かゝれば日月星辰の學を天文學といふ。これをまなぶ予なれば、日月星辰の事をとひたまはゞこそ御答もいたすべけれ。天氣の事は專ら雲風など大氣の中の異變にかゝはれば、天文家はしらぬもよし、之をまなぶはほかに氣象學てふ學あり、地文學てふ學もあり。さるをしゐて予にとひたまふ故、御門ちがひとはいひき。風雨雷電は天にそふものならで地にそへるものなるを、ゆめわすれたまふな。さすればかばかりの事に迷ひたまふ事はあらじ、といとこまやかにとき示せば、三人は今ゆめさめつる心地して、おのが愚さをはぢ、天文學のよき理をよろこび、更たくるまで打語へり。折しも雲ふきはれていざよひの月の隈なくてらすに三人は打よろこび、いさみてなむかへりける。天文家もゆくりなく心よき一夜をすでしければ、かくなむ。

かたりつゝながめあかさむたどりゆくまなびの道をてらす月かげ。

○玉堂隨筆（一）

南石外史

ふたごの衣物

雙生子は同樣の衣物を着せよとの古俚諺は尤味ひあり是れ兩人の心に不公平さ猜妬との心を起さしめぬ爲歟。

つんぼの眼目

罪人は悪口を能く聴き取ると云ふ古俳あり以て人心の汚れたるを見るべし何んとなれば罪人が特更に悪口を聴分る筈なし是れ悪口せる人己が僻みより其時の罪人の身態が自づから身を咎むるさまに見ゆるなり。

めんさ云もの

假面と云ふもの甚はだ面白し之を能に用ひて演劇に用ひざるを怪訝すべし蓋し昔日は人一々假面に能はふを得ず又たうれ程にせずとも大抵にて人は想したり例へば能の女形と演劇の立お山さの相違の如し總じて昔しは物事皆この類なり西洋にても頭を装ほひ飾るなベール(面を冠ぶる)すと云ひて面をつくるとは云はず昔は又た面を冠りたるを知るべし然し此より一進化せば女役は女がつとめ男役は男が勤め更に進めば性質の似たる役者其の受持の役のみに勤む。

旅行と歴史傳

メルボン澗遊記の末に書して曰く旅行するものには單獨の實事は面白からず之を比較するの習慣より直ちに概括を好むの風に移る此に於てか眞の樂しみありと思ふに書物の旅を行くもの亦然り歴史の旅行を爲すもの特に尤も然り事實を多く知るもの何の効かあらん當今博覧強記に誇るもの須らく其事實を概括して眞の樂地に至るべし。

だじやれの初まり〳〵



〇うり買を枕詞で

勸學院の雀は蒙求を囀るといふは古き世話なり。さすが九重の内は雲井ちかき故にや末々のいやしき物賣るものまで風月のなさけある事ぞかし。鳥を商ふもの御所方を賣まはりしが町方にて賣るとはちがふてきやしやに枕言葉をつけて賣らんと思ひ。霜枯の蘆鴨へ足引の山鳥は〳〵と賣りけり。そのあとから青物賣が是を聞てそれがしもまくら事ではない枕言葉で賣ましよと思ひ。澤邊の根芹はわらがねの土生姜はとよばる。去かる所にさる御所方より中間一人白張着て出けるがはるかに二人の商人を呼びければ。先鳥賣立かへりてあし引の山鳥が入まするかといふ。中間いやそれではないといふ。所へ青物賣來たりてあらがねの土生姜が御用かといふ。いや〳〵それでもないおれは千早振かみ屑買かとおもふて呼だ。

〇觀音さまの仰天

信濃の國草津の湯の山にてそのほとりの人どもある夜の夢につげて曰くわすの午の刻に三十ばかりの髭男かげなる馬に乗り湯に入來るべし即ち觀音菩薩なり汝等ねんごろにおがむべしとて夢さめぬ。村中の者ども驚き夜明けて互に告げゝれば皆人つゆもたがはず不思議の事なりとて湯のほとりを清め注連をひき香花をそなふ國中に聞つたへ夥しく集りて今や〳〵と待ちけるに。午の刻過ぐる頃夢の告に露たがはぬ髭男弓をかたげかげなる馬にのりて來る。やれ觀音さまよと多くの人立騒ぎておがみ來る。此男大に驚き心得ぬ事かなと人々に様

子を問どもたゞおがみにおがむ計なり。不思議いよ〳〵晴れずある僧の手をひたひにあてゝおがみ入たるがもとによりていかなる事にやと問ふ。此僧夢の告を有のまゝに語りいひも果てず南無觀世音とおがむ。此男人々に向て曰くわれハ甲州がたのさむらいあるがゝト狩に出て狼に臀をかまれ紙養生の爲湯治に來る觀音とは勿躰なしとてあたこあたへにげまどへば人々是を聞てさればこそ臀くらい觀音と昔から巾せば愈々觀音さまに疑なしとて此男の臀につきておがみあるいた。

○たこと坊主さま

あこぎが浦にひくあみだ菴といふ寺僧よる〳〵しのび〳〵に買にやるでつち十日あまり風をわづらふて臥せりければ詮方なく自身頰冠りして粹の魚屋に行き夜ふけ人しづまりて後戸をコト〳〵とたゝきければ亭主内から急に誰じや〳〵と高らかに咎めければ在家から來たが生だこはあるかといふた。

小說

○理想の紳士　月の舍忍

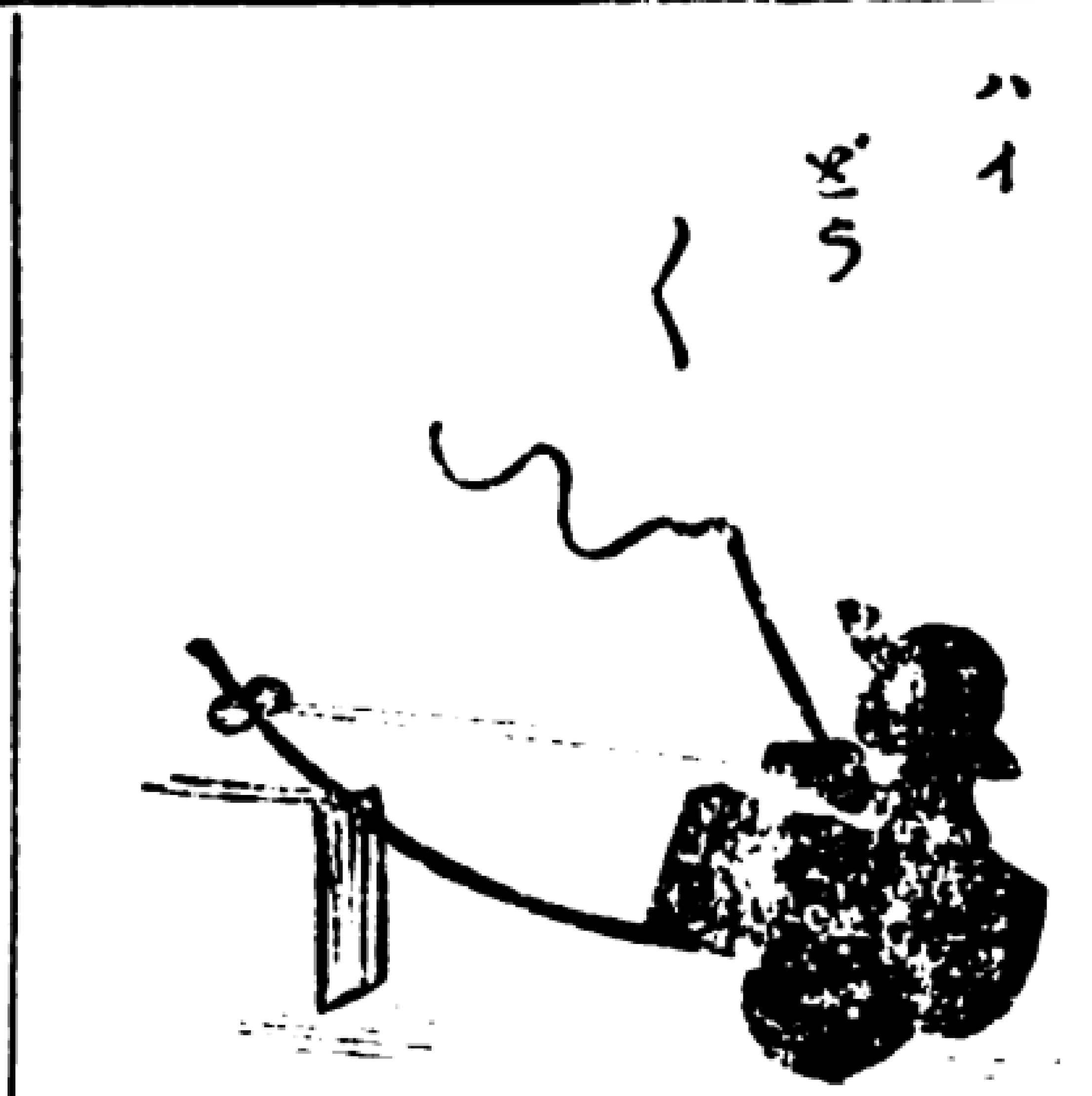
○…………　不知庵主人

右二稿可相掲の處ろ本號には既に多葉の附錄小說有之候まゝ餘り小說澤山にてはと存じわざと次號迄相扣へ候

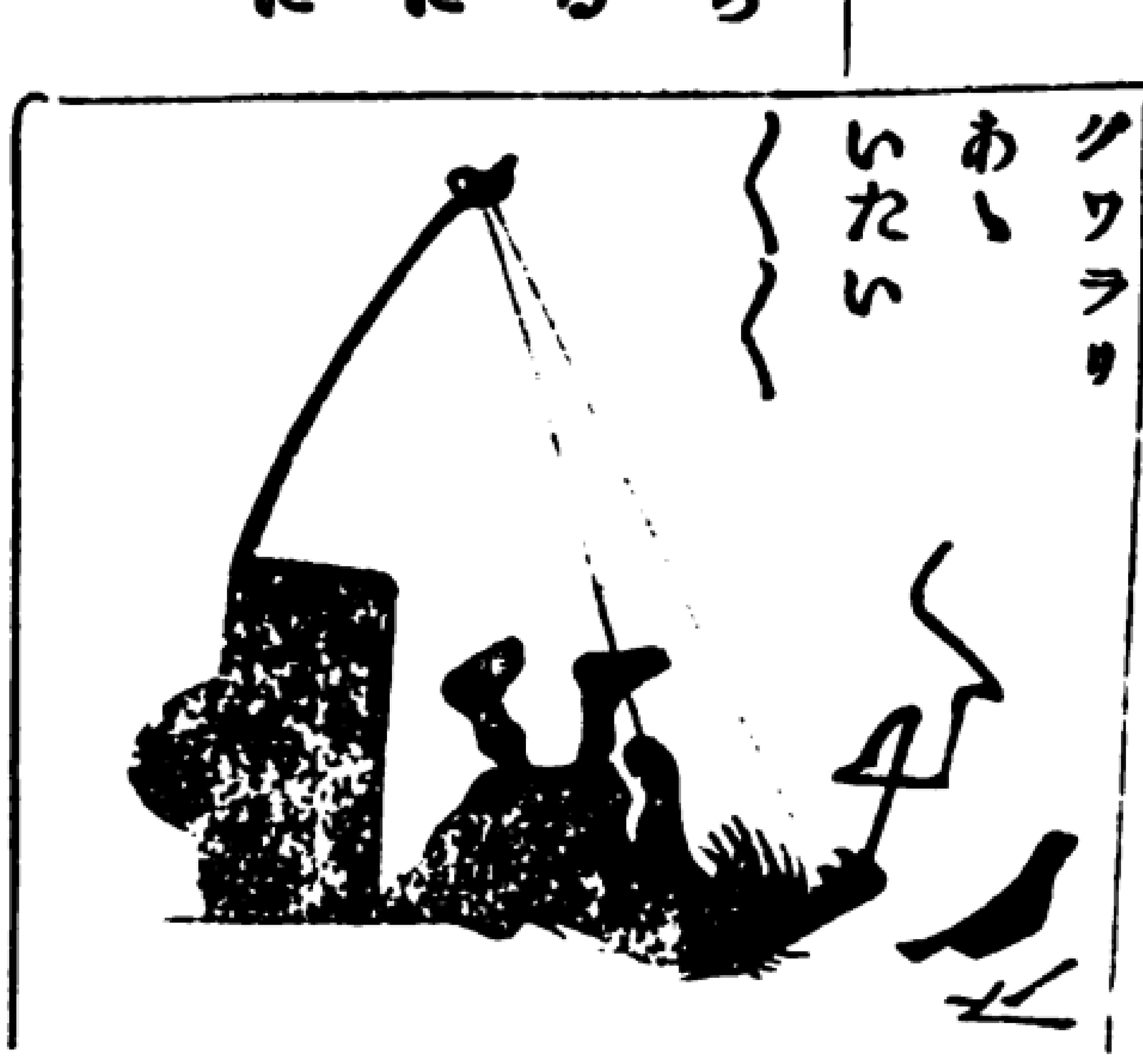
兒藍

○憐れなる娘　ほたる譯

黒み渡りたる冬の夕、身を裂く計りの寒風、鵝毛に似たる白雪の、ふりつもりたるその中を、破れ衣に垢づきたる、帽子戴きそが上に、傘さえに泣く音をば震える齒莖に噛しめて



ニューヨークのブロードウエーを、彼方此方にさまよえる、年まだ弱き小娘が、疲れ果てけん傍の軒端に立て身に積る雪は拂えど身に積る拂ひ



兼たる憂事の多き此世を喞ちつゝ悲るゝ手をば懐へ容るれど冰る計りなる身を如何にせん苦しやと伏したるまゝに起きもせず。

娘は軈て我名をば呼ばれたるに打驚き起き上りて四方を見るに身は麗はしき寢床の上にあり兼て欲しと思ひつる淡紅色のリボンは頭にあり、弄びたしと欲ひつる毬もあり、人形も亦た二つ三つ枕元にかざりあれば、うれしさのあまり何人の賜ものぞと視廻すに人影さえになし疲れたる躰も何となふ輕げに思われたれば寢床より下んとするにパリス製の靴あり己が躰を顧れば垢じみて破れたる衣類は何處えやら、向ひのジエスがクリスマスに着る時我れも着たしと思ひつる深紅の絹上衣、胸かざりさえ金あればやがての事に走り出て戶を開かんとなす折しも入り來る一人の女あり、娘はット其顔を見上ぐればまごう方なき我が母、四年以前に別れたる慕はしとのみ思ひたる母なれば、母上よなつかしかりし母上よ呼ばんとするに聲出でず、母は娘の手を取りて彼方に行けと云はぬ計りに持なし賜ふにぞ、何事ぞ永遠も御前に置き賜ひてよと云へば忽ち聲ありて行けよ行けよ此所に置く事協わじと言ふに驚き目醒むれば身はなほ吹雪の内にあり、歩み出でんと思へども今朝より一度の食事もせず、多くの意じわるき小供等に石などにて打たれたる痛みも激しく饑と疲れにまたせんようもなかりけり、よし家に歸りたりとて父も居まさず母もなし慈悲の心も知らぬあらうれし主人の手ひどき鞭に死なんより此處にて死するぞましならんとまた打臥したるその折しも身は今迄の冷たきに似ず饑えたる思もなく亦た温かし、目を上げ見れば二人の天使娘の腕を取てつれ行けり、樂しき音樂うるわしき友、艱みもあく憂もなく饑も痛みも疲れもあしこれぞまことのパラダイス父も居ませば母もあり、これぞ憐れと後の世の人も吊ふブロードウエーの小娘あり。

これは幼兒の死せる時の心を表したるものです此を讀む方は世の中にこのような憐れな小供がたくさんあると知てあなた方の幸なる事を喜でよく御兩親に孝心を盡して下されませ。

米國を獨立せしめたる者にて其の勢の海軍よりも陸軍よりも强きは其の信用なり。　ウエブストル

賢人に己れなく神人に功なく聖人に名なし　莊子

究傳

○野に叫ぶジョン、ゼ、バプチスト

今の日本は將に光の顯われんとする時なり、世には螢の光りを捧げて既に明かしと云ふものあり、亦た有明の月を望みて世決して暗からずと安んずるものあり、左れど余は思ふ現今

の景勢は太陽の未だ出ざる以前なり、政治にもあれ、文學にもあれ、道德の議論にもあれ、實に尙ほ暗黑也。

經に云く、偖て玆に神の遣はし玉へるヨハ子と云へるものあり、その來りしは證の爲なり即はち光に就て證を爲し惣ての人をして己に因りて信ぜしめんが爲なりと。今を距る一千八百余年の昔し、ユダヤの野に大ひに叫びて宣傳するものあり、其の聲を聞けば云く、天國は近づけり汝等悔改めよと、蓋し我國の今日は恰かも此の聲の聞こゆべき時なり。

抑そもユダヤの民と云ふは、昔し姦惡なる數多の國民中に聖別せられて、政事正しく民心高潔ありし一種絶類の民にてありき。左れば人々不羈獨立の精神に鬱勃し、慨然として天下の重きに任ずるの氣象盛んなりつるに、一旦羅馬帝國に切り從がへられ、恨みを飲みて之に屈服したるなり、稅吏は威權を負ふて臨み來り、慘酷なる重稅を科して只管ら己が慾を充さんとせり、然るに學者は空漠として無責任ある議論に日を明かし、敎法家は虛禮に流れて肉の同輩となり、只だ志ざしある者のみ切りに慷歎して救主出でざる可らずと泣きぬ、左れど少年の酒色に溺るゝもの多く、富者の我慾を張るもの多く、官吏の羅馬に媚ぶるもの多かりし。歎くものは彌よ歎きを益し、墜落するものは彌よ墜落したり。

時にヨハ子は出で來れり、身に駱駝の毛衣を着、腰に皮の帶を束ね、蝗蟲と野蜜とを食して風雨に暴さる。大聲警告して叫ぶやうは、汝爾先づ其の罪惡を悔改むべしと、斯時ヨルサレム及びユダヤを擧りまたヨルダンの四方より人々出で、之に就き、其說を聞きて悔るもの多し、ヨルダンの河は水淸く流るゝなり、ヨハ子彼の悔ひしものに洗禮を授けて其のしるしを與ふ。

其の聞えいよ〳〵高くなり、義に改むるものゝ日に增し加わりしかば、平素學に誇り僞善に誇るパリサイ宗の人々、及び富に賴みて貧しき人を蔑視するサドカイの人々等も亦た出で來れり、彼等は世の評判の余りに喧ましきに驚ろき、若し己等も均しく洗禮を受けずば反りて民に後れたりとやせらるべきと思ひて、特更らに殊勝を裝ほひて亦た出で來りつるなり。ヨハネ之を見て憤然として怒り、汝ち蝮の裔よ誰が汝等に來らんとする苦罰を避べきことを告しや、汝等先づ悔改めを證するの實行を現わせ、人を迷わし權家に媚るの欺むきは爲果すとも決して神を欺むくことを得ずと。

夫れヨハ子は光に非ず、光に就きて證を作ん爲に來りし也、

左れば彼は自から能く眞理を知り盡す能わずと云ども、伏して昔日の預言者の言を思ひ、ユダヤ國民が古來に熱望したる信仰を思ひ、つら〳〵惡濁を極めたる當時の景勢を考ふれば、必らずや大ひなる光り出で來りて之を救わざる可らず、謹んで勢ほひの樣を見るに最早や其時に近づきたりと確信して、上み王侯より下も貧しくして罪を侵す田夫野人に至るまでに、汝等先づ其罪惡を悔ひて光明を望むべし、天國は最早近づきたりと宣傳したり。彼の慷慨は眞の道に適なへり、彼の熱心は義の爲に起れり、彼の自から信ずると極めて重もし、彼の世に盡すと尤も親切あり、其の愛の如何に深く、其の勇の如何に盛んなりし哉。

然れども彼は史記戰國策の英雄にあらず、酒に醉ふとを誇るの英雄にあらず、平民を輕ろんじ、暴虎憑河の勇に高ぶる無謀威力の豪傑にあらず。其の怒るは道の爲にて、其の雄々しきは正義に盡すが故なり。故に、其の聲の疎ろき其の裝ほひの恐ろしきに似ず、若し眞に悔改むるものを見れば慈母の如くに優さし、然れど若し僞わりて善に與みする卑賤なる飾り手を見れば怒ると獅子の如し、其聲轟然として激し百雷の落つるに似たり。然りと云へども彼は自から誇るものにあらず、好く己れの力量を知りて絕へて過分に任ぜず、身は只だ來るべき人の爲に道を備ふるのみ決して此の暗黑界に光りとなるものにあらずと信じたり、左れば其の徒弟の益々加わり、其の名聲の彌よ盛んなるに當りて、常に云はく、我は爾曹を悔改めさせんとて水を以て洗禮を授く、我より後に來るものは我に勝りて能力あり、我は其履を提るにも足らずと、嗚呼何んぞ其の強くして且つ能く謙くだるや。

暫らくして果してクリストは出で來り玉へり、教へて云く人類の罪惡は神によりて救わる、我は道なり眞なり生命ありと。クリストすでに出でゝ傳道せらるゝを見れば、ヨハネ大ひに祝して云く、實に此の人なりと。之よりして彼は亦た口を開かず。

然れども彼は徒づらに隱居せしにあらず、實にクリストの所云る救主たるを確認し、此の人出でなば世はすでに光りを得たりと思ひて、特更らに再たび辨論せず、其の率ひける數多の徒弟を悉とくクリストに屬せしめ、身も亦た其の教を聞きて謹んで德を修めたり。然るに茲にガリリー、ピレア等を治むるヘロデ王と云へるあり、殘忍にして色に耽り、民の膏血を搾りて春宵の宴もりに費やす、最と〳〵惡むべき王なりけ

る、左るに倘分きて悪むべきは、其の嘗て羅馬に遊びたる時、兄の遺妻ヘロデアに懸想し、之を連歸りて其の妻を追出し、爲に戰亂を起すに至りしとなり。

當時滿朝に王を諫むるものなく、反りて之にへつらひて其の愛を迎ふるもの多し、而も法教家にして之を責るものなく、人民にして亦た之に憤ふるものなし。王はさすがに心の安んぜざる所ろあり、密かにヘロデアに計りて一策を案じ、則ハち之をヨハ子に告げて事の是非を問へり、蓋し彼等が心中に思ふやうは、ヨハ子も亦た吾等が權威に懼て敢て善からずとは云ハじ、扨て彼にして若し之に贊成せば万民は皆なヨハ子を信じて吾等の婚姻を正しとすべしと。　則ハち聘を厚ふしてヨハ子を招き、莞爾として此の事を計りたり。　ヨハ子聞きて勃然色を起して怒り、之れ極悪の姦淫なり、一平民にして之を侵すも猶ほ決して容す可らす、況んや王をやと、少さかも假借せず酷責したり。

王は不平に堪へず、直ちに捉へて獄に投じけるが、左りとて亦た之を殺すとも得せず、色慾と憶病と或は激し或は懼れて、端なく數年を過せり。然るに或る酒宴の砌り養娘の舞堪能なるを見て賛美に堪へず、酩酊して激賞し、如何なる物にても求めに任せて予んと誓ひたりしかば、女は母の勸めに因りてヨハ子の首を盆に載せて賜ハれと云へり。　王は優柔にて果断なし、たゞ既に誓ひたると席に列らなる者との爲にヨハ子の首を斬らせたり、女は盆に載せて母に捧ぐ、母は褒姒の如く此時初めて笑ひたり。

嗚呼、古來俊傑の士少なしとせず、然れども其の多くは或は虚榮に陷いり、或は俗勢を賴み、只だ其の功名を爲さんとしつるものなり、其他幾多の純潔なる眞の義人少なきにあらずとは云へど、中に就て余はクリストを除くの外先づヨハ子を以て第一流の人物とは爲すなり。其の勇にして而も謙遜なる、其の義にして而かも道に勉めたる、其の神俊にして能く時勢を看破したる、其の不德に憤ふり不義を責むるの大膽なる、其の荒野漠々たる間だに衣食するの甚はだ節儉なる、悉とく是れ余輩の師とすべき者にあらざるはなし。故にクリストは之を評して云ハく、人々よ爾曹何を見んとて野に出しや、風に動かさるゝ葦なる乎、然れば爾曹何を見んとて出しや、美服を着たる人なるか美服を着たる者は王の宮に在り、然らば何を見んとて出しや預言者なるか、然りわれ爾曹に告ん彼は預言者よりも優れたるものなり、誠に爾曹に告ん女の生みた

る者のうち未だ洗禮のヨハネより大ひなる者は起らざりし、彼れ來りてパンをも食わず酒をも飮まざれば惡鬼に憑れたる者なりと云へり、然れば此の代の人々を何に比へんや、童子市に坐し互ひに呼びて、我儕笛ふけども爾曹踊らず悲歌をうたへども爾曹哭かずと云ふに似たりと。見よ、今の日本は實にヨハネを要す。

寄書

〇在宮中（課作）　　洲煙女史

愛香梅一樹。栽在二御溝西一。縱被二風霜壓一。高枝不二敢低一。

〇京友封花寄來　　無名子

明窓倚レ机病餘身。恰好來尋自二故人一。卷後留レ香櫻一朶。手中掬得帝城春。

〇短歌十首　　津田久之

早春鶯
春の雪こぼるゝ梅の梢よりにほひ初たる鶯の聲

同
雪消ぬかた山かげの小笹原なく鶯の初音寒しも

早春月
愛宕山去年の白雪仄見えていまだ霞まぬ春夜月

月前梅
春霞一筋なびく川上の梅の林に月ぞ隱れる

遠山霞
春雨は麓の里に打けぶり空に霞める比叡の遠山

夕春雨
山本に一村なびく夕けぶり霞に消て春雨ぞふる

山寺殘雪
櫻咲深山の寺の苔庭のみどりまだらに殘る雪哉

月前花
薄霞なびく高根に見ゆる眉月にしらめる山櫻花

水邊落花
大井川山かげ下す筏士の小笠につもる花の白雪

山寺落花
山寺の鐘の音寒き朝ぼらけ有明の月に散る櫻哉

〇佳人の美談　　鶴鄉散士

散士平生最も敬愛せる一令孃あり一日講習の餘暇秋晴を趁て佳人の廬を敲けは琴書靜肅窓几清明たり斯て暫時英文の評論なさして時を移せしか軈て色々社交上の談話に入りければ散士は無遠慮にも例の通り當今女子の短所を指摘せしに令孃も頻りに嗟嘆せられたり姑くありて喟然として散士に告けらるゝに女子教育家の御注意深き今日にも拘はらす兎角貴孃中輕燥浮薄の行ありて猶且愚を飾衒の習に寄するもの多きさす余か知友中僅に字を識り理を解するもの多しと雖とも其身を修め行を愼み兼て家事經濟の大要に注意するものとては寥々として甚稀なり就中人は何時にても富貴安樂を享くへきものと心得るとは痛き誤にて人間には復た榮枯盛衰の變あるを知らさるへからす斯て後來我身か如此き變に處すへきの覺悟もなく茫然壯年の日を看過するは實に悲しきとなり畢竟するに人の妻となり母となりて家事を拵ふるの能力なく夫を輔け子を教ゆるの德行なかりせは女子の女子たる所以果して安に在る寧ろ女子たらさるに若かさるなり。令孃の意[illegible]る輓近の女子か智育に偏して實用に遺すの弊あるを憂ふるものにして實業的の教育なかるへからすとに在る如し散士は尋て藝娼妓の廢滅論に及ひしに令孃曰く

藝娼妓あるは實に我邦の一大瑕瑾なり素より之を廢せさるへからす然るに奈何せん近時の現況を見るに世の父母たるものは所謂男を生むを喜はすして女を生むを喜ふの傾を生するのみならす其婦女も亦斯る淺ましき業を執るを甘じ氏なくして玉の輿の僥倖を希圖するは單に此の道に限る樣思ひ恬として愧る所なき如し豈に悲に堪ゆへけんや畢竟斯る浮薄なる人情の女流に生せしは職として男子か品行の高尙ならすして上流の紳士輩を始め藝娼妓を愛するの惡弊あるに由れるとは疑ふへからさるの事實なり若し一般男子か藝娼妓には目も觸れぬと云氣風になれは如何に藝娼妓か媚を呈せはとて到底其術の行はれへくもあらす自つから退て實業に就くの已を得さるに至るへし請し單に女子の地位を高めんとて妄に女子のみを責むる可からす男子社會の惡弊をも同時に矯正せされは結局完全なる目的を達し難かるへしと。

令孃除未た二十を超へす而て此の卓見あり散士之を聞て愕然として頂上一鍼を受くるの思あり嗚呼人の妻たり母たるものにして苟も令孃の高風あらは遁はれ新日本の一婦人として愧つる所なかるへし世の深窓に居て閑日月を送るもの安そ自ら顧みさるへけんや聊か記して世の姉妹に示す。

聞書

○東京府會警察事件の發見各位に申す

拝啓聞くだに厭やな事件を探査せんとの御盡力はお骨折不一方と承知し恐縮の至に候盜賊を捕へて見れば吾子なりマッタ風なば捨つて見れば吾身なりナド申し絶大の勞苦を爲したる決果が歸り己の上に落つるは何よりの歎息に候諸君の御盡力も萬々一に於ては或は斯る歎息に陷いるやの譏もなきにあらねどされば とて若しお調べにならねば全躰が悉く盜賊なり氣なりと見止めらるゝの不幸あるがゆへ萬々の九千九百九十九迄で確かなる見込もあれば無御遠慮探査の上へ速に光明至正の純潔を証せられたく候左候はゞ今日の御勞苦も其詮ありと申すべき歟無論御承知の事とは云へ少さか御慰めを兼ね愚見申述候敬白

四月三十日夜　東京飯田町　井上次郎

時事

○宮庭錄事

皇后陛下の御謙德

去月二十七日、陛下が赤十字社の總會に行啓あらせ玉ひつる節は式場にて御目録の合旨を自から朗讀あらせ玉ふすらあるに、其の社員へ對し、整列員へ對して　寶輦を駐めさせ玉ふなど、吾人臣民は之を拜して感涙にむせびたり。謹告す玉樓の各貴婦人方、願わくは平素此の有がたき叡慮の在る所を奉體して、切に慈善なる慈善事業に力を盡し玉わんとを。

青山御所の御養蠶

青山御所にては例年の通り養蠶遊ばさるゝよしにて、群馬縣下より同事業に老練なるもの十餘名を此程指南として召上られ　皇太后陛下には親から御養蠶遊ばさるゝよしにて、女官の方々も本年は一層勉勵して從事せらるゝよし、而して亦た本年は右の繭絲を以て羽二重に織立玉わんとて、同縣下より機女數十名を同たく召上げ遊ばさるゝ由重ね〳〵有難き御事なり。嘗て放翁の句を吟するに云く、貴人不出長安城、宮帶華繡、負汝謌、と實に貴婦人等くれ〳〵も不夜城を出でられたし、切めては其の緑する所ろの帶絹を織るだにせられよ。

皇女常宮

昨秋御降誕の皇女昌子内親王常宮には至て御健康に御生長在らせ給ふ由傳承する處に據れば同宮へは今回乳人を參らせずして一切牛乳を差上げ其他御養育法を大に改良し御運動を爲らせらるゝ處より女官數名御介添して目下日々赤坂、四谷兩區の市街を馬車にて巡らせ給ふよし。

○女學生洋行の可否

近頃に至り女學生洋行の事將に流行し來らんとす、恰かも男子社會に於ける明治十一二年の曙の如し。幸田延子がバイオレン科の修業として米國獨逸國へ差遣わさるゝは官命なるが、去月三日伯林に向ふて出發せられたる師範校女子部の卒業生相川かつ女、及び同廿七日ボアッナード氏に伴れて佛國に留學せられたる黒田孝女及び東京婦人矯風會員にして主に米國婦人禁酒會の運動を目撃せん爲に米國に向はれたる串田しげ女等は、皆な私費にて發程ありぬ、而して尚ほ此の氣運いよ〳〵盛んならんとせり。男子社會にて云はゞ今の日本は最早海外に留學する時にあらず、只だ卒業后旅行するの時代と來れりと云ふべし、數多の洋行者にも聞き亦た洋行歸りの人に就ても見るに、學問未熟の儘にて海外に留學したるは歸朝后効能極めて少なきが如し、寧ろ莫大の金を費し貴重の時日を消し、只だ流暢なる外國語と非日本の風俗とを買得るに過ぎず思に之れ今の我國に必要なるものにあらず。吾人之を女學生に就て考ふれば倘更に如此き感なき能わず、大凡そ本邦にて未だ學び得べき丈けを學ばざりし方々は先づ篤と熟考あるべし、西洋を見たるのみが錦繡とはあるまじくと思

なり。而して純然たる西洋風に敎育するには府下に女子敎育獎勵會の女學館もあり高等女學校に家政練習場と云へるもあり、大抵は之にて足るべし。只だ尤も高等ある敎育につきては吳々も帝國大學が早く女生の入校を許すに至らんことを熱望して止まざるなり。

○賄賂の成行

斯迄に喧ましく爲れる上は、實否は兎も角先づ之を調査するは府會議員が當に爲すべきの德たり、左れば府會が、田口大岡角田箕浦青木芳野の諸氏外八氏都合十三名の委員を擧て之が調査を任じたるは適當の處置と云ふべし。吾人が此迄聞込たる限りは多くは漠然として證跡なし、然りと雖ども若し確かなる證跡を得れば之を表白するに寸毫も猶豫するなからんと決するが故に、諸友にして若し之を得ば幸わいに吾人に報ぜよ。但だ願くは○○實に如此き證跡あるなく、幾多の風評は己が儘に吹去り、吾人が「日本」の詩を轉載したる丈けの粗鹵をも謹んで謝するに至らんことを。偶ま聞く童女の歌ふらく、

みちのくの忍ぶ文字ずり誰ゆへに亂れ初にし我ならなくに
もろともに哀れと思へ山ざくら花よりほかに知る人もなし
此たびはぬさも取あへすたむけ山もみぢの錦神のまに〳〵

吾人之を聞き慨然として云く、然れども天下何の處ろにも義人存す、義人の義しきは彼の風雲漠々の間に發光して以て其の義の勢力を彌よ增す、今回の事の如きは東京府會の爲めに大ひに祝すべきなりと。時に亦歌ふあり、

秋風にたなびく雲のたえまよりもれ出る月の影のさやけさ

○咸陽の市

新聞紙にて承はれば何故斯く物騷多かるや、殿方の御論判にステッキ、拳骨が御入用とは初めて承知し、いと〳〵恐ろしく侍る。世話にも女が交れば喧嘩が減ると申さずや、試みに妾わ等をも政治社會に立入らせて御覽ぜよ、郎等が御交際も少しは和らぎ、斯く迄に劍呑なるとはあるまじと存じ候。扨ては國會準備の實手段には先づ女流にも撰擧權を賜わるに候はめと思ひ、切角福澤先生に申上ても何ともお論じ下されず、女學子先生に申せば唐人らしく長嘯なされ、忽然夢上百尺巓、綠毛邂逅巢雲仙、相携大笑咸陽市、俯㆓仰塵世㆒三千年、などとて頓着されず、實に〳〵くやしくヂレッタク歯がゆく候まゝ讀者諸君に計り參らすになん、かしこ。

雛の　乙女

○福澤氏の家門幸福なりや

情を矯むるほどの僞善なし、喜ばしければ笑ひ、腹が立てば

怒るは人間至眞の情なり、徒らに之を窮屈にする如きは決して眞の道德にあらず、然るを况んや人世最幸福のホームに於て、可愛ゆきにピンとして見せ、撫でたきに叱つて見するなどは、寧ろ適當の敎育とだにするに足らず。吾人は年來福澤氏が非凡の人たるを知れり、何によりて知りしかと云ふに其の多忙中に能く子と遊び、嚴肅の中に能く子を撫け、毎度其の愛極まりし眞情を公けにして恥るなきに由り之を知り。過る十八日は賢息一太郎氏に目出度婚姻ありし由、翁が其の結婚披露の席上にて述られたる演說の如きは正に是れ、今の政治界を忘れ、婦袖へんぽんとして高砂を歌ふ樂翁に似たり。敢て問ふ翁が家門幸福なりや、さても〳〵羨やまし。

○山川氏の母勝壽院

兼て賢夫人の聞えありし方なるに、殘惜しくも落花と共に失せ逝かれぬ。去二十七日の「日本」新聞に云く、

陸軍少將山川浩氏の母堂[illegible]勝院は會津藩士西鄕近登之の女なり幼にして穎異夙に孝兒の名あり長して山川[illegible]氏に嫁す舅姑良人に事へて孝且至らさるなく閨闥之を賛美せり後三男九女を生む年四十四良人遠逝し子女皆幼少末女捨松子の如き僅に一才君之を撫し之を育し夙に起き夜に寢ね教育に從事し辛苦至らさる所なし明治戊辰の役起るや君慨然として云く婦女の頭髮衣服を裝飾するは平世の事のみ今國家存亡の秋女子と雖も悠々安居すべきにあらすと女子に訓誡して銃絮を資助し戰資を助けしおふて籠城に際し負傷者の看護彈藥の製造等凡百の事率先之に從ひ夜を以て日に繼き倦勞の色なく既にして城破れ君臣東西に離散し陸奥斗南に移住するに及て其苦難云ふへからす人或は其の辛苦を歎く君勵して云く人の手足を有するは自活するか爲めなり豈に人に依て生計を營むへけんやと自ら採薪機織の勞を執て家事を助け寸暇も屈撓せす嘗て藩士木村某其生計の立ち難きを歎す君云く蜉蝣たも猶ほ生存す豈に人にして自活する能はさらんやさ木村某其言に感し其居を蜉蝣庵と號し日夜職業を執りて厭はす終に生計の道を立るを得たり後其庵に掲る爲和歌を請ふ君之に題して云く

中々に人は人をもたのむ哉
ひな虫たにもみをたのむよに

斗南に在りて以爲らく方今の世尤も女子の教育を忽諸に附すへからすと四女五女をして漢學を修めしむ時に斗南に洋學を教授する者なし偶ま浩氏藩用を帶ひて函館に赴く五女捨松氏を携へ佛人某に托す後明治庚午君黑田開拓次官（今の内閣總理大臣）海外留學女生を募るを聞て大に喜ひ曰く是れ妾か宿志を遂るの秋なりと即末女捨松氏（時に十一歳）を以て遂に應せしむ本邦女子の海外に留學するは實に之を以て嚆矢となす是より後東京に來り老を養ふ平生他の嗜味なし讀書を以て消閑の友となす故に正史野乘稗史小說讀まさるなく又古今英雄閨秀の事蹟を談するを好む父近登之氏卓犖不羈細行に拘はらす尤も詩歌を嗜む嘗て權門に出入せす獨り志士と交を結ひ悠々自適せり故に人の推選するなく久しく閑職にあり會津藩京師守護の命を受るに及んで時事頗る切迫氏百方計畫する所あり終に拔擢せられて軍事奉行となる時人之を榮とす氏長沼流の兵法に通曉す又和歌を善くし歌仙の名あり時世を諷刺し時に或は權貴の忌諱に觸る君も亦和歌を善くし歌名を唐衣と稱す花鳥月夕吟詠する所多く秀作亦少しとせす然れとも敢て人に示さす今其一二を記す

題しらず

くれ待てひらくや花の夕顔に
ようめ凉しく結ふ白露

赤坂御所の櫻花を拜觀して

思ひきや賤かこのみも九重の
みはしの花の香にふれんとは

題しらず

花さかんころしもいかて旅衣
みやこをように思ひたつらん

文久三亥とし子浩か都に旅たつをおくりて

天下にこゝろくなをはあけすとも
おくれなさりそ武士のみち

君性謙遜村翁野娘と雖とも能く懇篤を加ふ又倹勤常に粗菜を以て膳に備へ自ら樂する甚帶し他の尊大自倣する者若くは奢侈豪華の態を視ると蛇蝎の如し君少しく酒を嗜むと雖とも毎に子弟青年輩を誡て云く爾等苟も社會の用を爲さんと欲せは宜く飲量を節すへしと然れとも親朋等置酒會宴には間暇献酬の中に交りて主客交も談笑醉舞詠歌の態を見て樂みとなす其節操質撲概ね斯の如し今歳四月十九日病に罹り二十二日享年七十三歲を以て終に逝く君臥中に腫物あり積年之を患ふ常に云く予は此腫物の爲めに命を蒔すへしと逝くに先ち三四日偶々和歌を詠ず

我なから何に名殘を惜しむらん
思ひおくへきこともなきよに

且つ云く妾は病少しく發するも劇痛を覺ゆ死ゝ亂して其若悶期する所なり辭世の如きは期する能はさるへし豫め詠して辭世と爲すと云く子女現存する者嗣子陸軍少將兼高等師範學校長浩氏次子理學博士理科大學教授山川健二郎氏長女高等師範學校女子部舍監山川二葉子次女櫻井氏に嫁し三女宮内省奏任御用掛山川操子四女の婿始審裁判所判事山川德治氏末女陸軍大臣大山伯爵夫人捨松子なり宜なる哉此人にして是等の子ある吁君の如きは古賢に愧さる賢夫人と謂ふへき耳

○一少女、日本内閣の書記官たらんとす　皇后陛下が東京高等女學校へ行啓在らせられたる細密の記事を掲げ、終末に云く、「國の基」第二號に、黒田總理大臣は橋本やう子の絹地に書きたる唐の子西の詩を一見して其達者なるに驚かれ、此人を内閣へ呼び書記官に任じて宜しからんと迄言はれたり。渡邊總長は傍より實に然り實に然り、誠に美事なりとて感賞措かざりし。左らば政治上に於ては内閣總理大臣、學術上に於ては帝國大學總長、共に女子を内閣書記官に任用するとに賛成なり。賀すべしく。

○遊廓の中心に「禁姦淫」と書す　デムマークの都コッペンハーゲンに「深夜男子傳道」（Midnight Mission to Men」と云へる會あり、熱心なるウライト氏會長となり、青年壯年の男子之が會員となり、都の遊廓中に於て放蕩遊興する青年を救助するとを目的となす、本會の會場は遊廓の中心にあり、白壁に。「汝ち姦淫を侵す勿れ」と大書し、會員は毎夜九時半より廓内の四方に散亂し、怪しげなる青年に出であへば直ちに之に同行して傳道し、若し左るものにあらずと云はゞ之が後に尾して其の行く所ろに行き、萬一不潔の屋敷に入らんとするに至れば腕力を用ひて迄で之を扣へ止め、兎も角して其の本會々場迄連れ來り、會場に於ては十一時より讃美歌を唱へ祈禱を捧げ説教するなり。然るに前年貸座敷の主人等連合して政府に訴たへ、彼の會場に如此き文字を大書せられては營業に差支へあり、命じて取消さしめ玉われと請願したるに、此の會場は素と官行の家を貸下られしにてありしかば、政府は願の如くに厳命したり、然るに會員は其の命の不都合なるを質して毫も聞入れざりしかば、巡査數名押寄せ階子を立て登り行きて之を拭ひ消したり。左るに此の會場と對ひあへる或る家の主人は、從來該會の運動を無頓着に見來りしに、此時に至りて大に憤發し、會員の爲めに

代りて其の屋の壁に同樣の文字を大筆したり、左れば巡査も此度は之を消すに由なく、今に至る迄で歴々として魔界に照れり、而して此の會ある爲に墮落より救われたる青年は非常に多しと云へり。

○女子職工の實况

米國政府に於て勞役部の委員たるウライト氏が報告する所ろに據れば、二十二の大都會に於て政府の監察を蒙むる職業に從事する女職工一万七千四百二十七人あり、其職業の種類は都合三百四十二、其賃銀は一週間平均五弗五十一セント、其女職工の平均年齡は二十二才七ケ月、其の職業に從事せし年月は平均四年九ケ月、而して右人員中未嫁の娘一万五千三百八十七人、夫兒あるもの一万四千九百十八人、教育を受しもの一万五千八百三十一人、健全なるもの一万六千三百六十八人、教會に屬せざるもの二千三百〇九人、愉快に生計するもの一万二千〇二十八人、其の品行は他の婦人と均しく、全体より評すれば益す改良進步に向へり。

○コルセットの大害を證する試驗

洋服にコルセットを固くし、其他万事の裝ほひに余り窮屈を旨とするときは、其害甚はだ多し。之を證せんとて、此頃ろ博士サーゼントは五百四十ヤードの距離をば躰操服を衣せたる十二人の婦人に二分三十秒を限りて競走せしめ、翌日はコルセットを纏わせ衣服を固くして同時間に競走せしめたり、而して后ち之を比較したるに前後兩回とも競爭前には平均一分間に八十四の脈動なりしに、前回は競走後百五十二うち、後回は競走後百六十八うちたりと。コルセットを固くすれば僅かに數分間のうちにてすら、既に斯斗りに心臟を勞すると烈しきを見るなり。

片々

○遠山きぬ子　華族女學校教員たりし同氏は去月三十日東京音樂學校助教諭に任ぜられたり。

○篤志看護婦人會　日本赤十字社にては去る一日篤志看護婦人會を開かれたる由なるが本月の幹事は蜂須賀隨子、大山捨松子の兩婦人なりしと。

○末松氏の婚姻式　末松縣治局長には芝公園地内へ建築の家屋落成せしを以て去月廿二日伊藤樞密院議長の令孃を迎へ目出度婚姻の典を擧げられたる由。

○九條道孝公令夫人　は去月廿四日大隈伯爵夫人を訪ひ來る六日午后三時より延遼館に於て開會する春季納會舞踏會の協議を爲したりと云ふ。

○横濱フエリス女學校　曩に同校長ブース氏が米國にて募集せられたる金一萬餘圓及び本邦にて同じく募集せられたる補助金によりて三階の大講堂を建築せられ既に落成したるに付來月一日其の開堂式を執行さるゝ由

○四日市婦人會　豫て同港の紳士紳商の令閨中に其目論見ありと聞つる四日市婦人會は彌よ今度川田茂通氏の令閨のぶ子田中直次郎氏の令閨結子八巻道成氏の令閨えい子船本龍之助氏の令閨つね子酒井禮一氏の令閨いそ子三輪猶作氏の令閨ゆい子の六氏發起人と成りて創設の事に決したる由

○東京女學 にては去月十一日を以て學期の試業を終り本學期よりは大に改良を加へて一層生徒の便利を與ふる由。

○婦人英語教授 イーストレーキ夫人は今般數名の貴婦人よりの請求に由り去る一日より自宅に於て每日午後一時より三時迄英語學及び家政學、博物學、禮式、室內粧飾等總て貴婦人の學ぶべき學科を教授せらるゝ由。

○保姆講習會 築地の東京府教育會附屬保姆講習會にて之迄講習生三十名ありしが內十三名は卒業して去る三十日に卒業証書を得られたり尚ほ聞く處によれば當期よりは一層擴張せらるゝの目的にて來る十七日頃より入學試驗を執行せらるゝ由。

○產婆講習會 埼玉縣下兒玉、賀美、那珂郡役所にては產婆風俗改良及產婆取扱を研究せしめん爲め同郡醫會に諮問せしに同會に於ては產婆講習會規則案を編制し全會一致を以て可決し知事の認可を經て施行することゝせりと云ふ。

○長崎の遊郭 長崎縣にては今度貸座敷營業地を變更し同區內浪ノ町の遊郭を廢し更に大浦居留地の近傍なる戶町大浦鄕を營業地と定め娼妓の取締も一層嚴重にして濫に郭外へ出さゞることに爲せしとぞ。

○高松婦人教會 は去る二月創立せし以來每月一回常集會を開會し來りしが追々進步の有樣にて去月十七日の常集會には橘正道岡田鞆群兩氏の演說等ありて來會婦人五十餘名ありし由因に記す同會は婦人の智德を發成するの目的にて新刊の雜誌を備へ置き會員をして勝手に縱覽せしむるの方法なりと云ふ。

○產婆學研究會の解散 先きに京都府下京區の產婆有志者の發起したる產婆學研究會は追々隆盛に赴きしが今度產婆教習所を設置したるに就き產科研究志願者は同教習所に入學することゝせば研究會を設置し置くも餘り必要ならずとて閉會することになりたり。

○讃岐婦人談話會 は昨春開設以來一週年に相當するを以て去月十七日總集會を開かれ規則の改正役員の撰擧ありたる由なるが林縣知事の夫人は總理に撰ばれたる由。

外報

○婦人撰擧權 近着の紐育ウオールド新聞は婦人撰擧權の次第に其の勢力を得るに至りたることを記して曰く英國內閣總理大臣ソーリスベリー侯が公開の席に於て婦人に選擧權を與ふることを非とするの道理之れあるを見ずと明言せし以來英國にて有名なる學者紳士にして之に同說を唱ふるもの續々之れ有るに至れり啻だ英國のみならず余輩が世界の各地より得たる報道を見るに各文明國に於て此の問題の考究され居ることを知るなりヨーク大僧正は英國寺院會議に於て男女同權の問題は正に決定されんとす此れより二十年後に於て男子の有する特權にして等しく智識ある女子が有する能はざるものは之れなきに至るの望みあるものなりと述べたるよし現にスカンヂナビアンの女子は文官たるの自由を得んと欲し諾威國會に其の請願を爲さんと目論見居ると云ふ又たデンマークにて村會參政の權を女子に與ふることの請願書を內務大臣、上下の兩院議長幷に上下兩院に提出したるよしなるが其の請願書は二十萬の婦人が調印したるものなりと佛國の女子は他國の女子に比して活潑の職務を爲すとなれば隨て其の利害に關係ある官吏即ち女子が男子に對して起提する訴訟を裁決する裁判官にも女子をして關係あらしめんことを希望せり英領ビルマにては女子の納稅者は一村のことに投票するの權ありマドラス公領に於ても町村に關して女子は有と同樣の權を有しボムベー公領に於ても亦た同じと云ふ又濠領亞細亞の十殖民地に於ては自治村なるものありて一家の女主人は亦た投票權を有せりマン島及びピトケールン島に於ては女子は充分の撰擧權を有しタスマニア及びアイスランドに於ても女子は同樣の權を有せりニユー、ジーランドにても女子は町村撰擧權を有し現に立法院は女子に國會議員撰擧權を與ふるの法律を通過したりと云ふヴヰクトリア。ニユー、サウス、ウエルス。クインスランド。サウス、オーストラリア及其他諸島に於ても女子は町村撰擧權を有せり云々と（四月廿七日每日新聞譯）

○世界最大の學校 英國スピタルフヒールドにある猶太人救助學校と云ふは全世界中最大の學校なり、生徒は現に三千五百人あり其中ち童兒二千二百五十八人、女兒一千二百五十八人。

○合衆國公立學校 去年中米國中の全公立學校維持費は一千四百九十八萬〇八百四十一弗にて一昨年よりは一萬弗の增加、而して去年中の學齡幼年者は百七十七萬二千九百五十八人なるが現に學校に就業せしは百三萬三千二百六十九人、教員の數は三萬一千七百二十六人、其年齡の平均は一人四百十九弗七十五セント。



附錄　上

今の夢

饗庭篁村

枯はてゝ人目も遠き草の庵倒れかゝりし破垣を纏ふてわづかに支へたる烏瓜さへ名には似ず赤くからびて西風に音さびしくも散る木の葉殘る野菊の花細く晝の燈火の光なく娘が手なれし天神机に手向の水も已が手に汲み出す如き涙をば袖に拂ひて線香の煙に咽ぶ咳きも四邊見廻し書置の一通机の上に置き襷の紐に膝を結び終り亂れぬ覺悟さへ子に引かさるゝ後ろ髮固く束ねて用意の懷劍抜きかけて見る燒刃の匂ひ母が形見と懷しく寫ともなく我顔を寫せば娘に逢ふ心地未來の母と此世の娘なつかしや不便やとまた一時雨さそふ裏紫色だつも佛の誓ひ來世は救はせ玉へかしと抜き放して眼を閉ぢしが閉ぢし眼のそれにさへ映る我娘の俤に握りし手もと力なく又取り直すは刃ならで心の迷ひ迷ひの心、

抑も此人は誰なるぞ。東北の一諸侯の御内にて食祿はいと輕けれど忠義は重き石津三平と云ふ者の女房なり夫三平は忠と義に命を棄て君への諫言重役同僚へ意見を陳じ大義を論ぜしかど時その時にあらずして身も其地位にあらざるゆゑ潛越なり過言なりと却つて不興を蒙りて閉居の身となりしを憤ほり一書を遺して自害せり此事いよ〳〵聞え惡く其説の用ひられざるより面當がましく死したるか武士と生れて誰か死を惜む者あるべき我等が彼に同意せぬは他に死所あるを知ればなり自殺して身を潔よくするは匹夫の事にして誠の忠臣のなすべきにあらずと誰取上て其の遺書を主君に呈する者もなく剩さへ君命も待たで自まゝの生害曲事なりとて食祿をも召上げられ妻子は追放せられたり女房お累は悲しさの上に歎きを重ねつゝ住み馴れし屋敷を追立られ城下はづれの山里にわづかに身を隱すほどの家を借り七歳になりしお玉と呼ぶ夫の形身の手を引きて此の草の戸を分け入りて左りとも再び召返さるゝ恩命あらんとはかなき頼みを力となして夫の佛事を心ばかりに營み居しが生家にてはまだ三十にも足らぬ年なり其娘を他へ預けて再縁する心ならば引取りて世話をすべし其まゝにては君の御不興うけし者を庇護するやうにて後めたし故に再縁の事を承引ずば物一品も惠むまじと繼の母とて氣づよき詞によし餓て母子が死ぬまでも操は誓つて破るまじ夫れも夫に捨

られて離別せられし上ならば親の仰にも隨ふべきが夫ハ忠義の爲に死し其を忠義とも立られず犬死なせしそれのみか追放せられし今に及び妾が操を變へもせば夫ハ何となるべきぞ特に是れ此の忘形見此子を他人にかけらるべきか死なば夫に冥土に見えん生ば此子と共に榮えん二所明神も三世の諸佛も照覽あれ此志しいかなる事に逢ふとても變るまじと心に誓ひ始めは衣類手道具を賣代なし後にハ膳家具までも賣拂ひしが今にも戰爭あらんかと危む折ゆゑ市人も捨直あらでハ引取らず家重代の刀さへ命にさし替あらざれば涙の顏を別れと見る鏡と共に賣拂ひ細くも廻す糸車針仕事などして日を送りしが追放御免の沙汰はあく髮を忘るゝ種ともと思ふ娘を見る度になか〱涙の媒にて眼の惱にさへ罹りければ針仕事をなす事もならず日に〱迫る饑を防ぐ方便も今ハあらざるのみか國事はいよ〱多端となり危急存亡の秋なりと聞くにいよ〱忍び難く封書のまゝに家に殘る夫の遺書に女ながら我が一念をも書加へ又實親にも手紙をつけて此娘を托し夫と共に刄に伏して死しなば殿樣御家老方も少しハ憐と思召され夫の遺書の世に出て一ヶ條も用ひられなば未來でいかに本望と思はれん且は御家の爲ともなるべし二つには追放も免り娘が世に出る端ともならん左樣ならずとも孤子とならば誠の孫なれば少しは慈しみもあるべきか左すれば貧苦の母と共に飢て死ぬには勝りたり兎にも角にも生甲斐なき身死して夫に冥途にて逢ふをせめての樂みとして自害なさんと決心し夫の命日を待ちつけて母は眼が痛みて歩みも捗取らねば其方かはりて父樣の御墓に參りて來よかしとお玉を出しやりたる後ち偖こそ斯くは覺悟を極めしなり

辛苦につれて子の智惠も益田が池に風荒れて枯尾花の末靡き合ひ城裏寒く淋しけれど生れついたる孝行の母を思へば道も急がれ市へは出ずに野を越して夕暮悲しく立かへるお玉は榛の木の切株に足を痛めて轉かゝるはづみに挾き袂より翌日の焚木と拾ひ溜し松子を皆な溢し破りて血の出る足は厭はずまた三つ四つと拾ひ入れしが塒に歸る烏の聲日は沒りかたになりたるにぞ拾ひ殘して恨めしげに跡を見かへり空を見上げ跛ひきつゝ驅け歸り母親さん只今と詞を先に血の爲めに足についたる草履を拔ぎ上る椽先立ち出る母親オヽ早かッた寒かッたかと今まで泣いた其顏に笑を作れど泣聲震える手にて引寄せて思はず咽る悲しみを胸に押へてオヤお前の足の血はエヽ轉けて樹の根で突いたとかオヽ大變紙で結へてやりませうと

今我が咽喉へ短刀を突立んとせしよりは胸跳らし血を拭き取りて紙にて結べばお玉も何やら物悲しく折角お寺の山へ上ッて松子を拾ッて來ましたのに轉んだはづみに半分ばかり袂から。オヽ溢したか能いではないか焚木があければ彼の垣根を毀して焚いても大事はない夫程にせずともツイ私が原へ行けば二日や三日の。イエ母親さんがお出なさらずと私が直にと立つを止め今夜ハ夫ほど寒くもなし明日は粥を温めるばかり是ほど松子があれば澤山ゆゑ最う暮方ゆゑ外へ出る事ハよして戸をメめてお前によく云聞す事もあればと云ふ顔を見て云聞すとは百人一首の講釋でござりますかと心配そうに問ふ娘これが如何して殘して死なれやう彼時思ひ止まらずば今ま歸つて此子がどれほど泣悲しんだで有らうぞと思へば最早堪へ切れず聲をあげて泣たるが心づいて表の戸をメめ燈明の火を掻き立てお玉を膝の傍へ引寄せ何を隱そう母親さんハお前を寺へやッた跡で自害して死なうとしました吃驚しやんな斯う打明て話すほどなれば決して〳〵最うそんな事を爲る氣遣ひはない左りながらよく聞いてお呉れお前ハ利發ではあるけれどまだ七歳委しい事は知るまいが親父様はお國の事を案じて此に在る此の遺書を殘して御自害なさつた其跡で是が殿様の御手元へも上ることか御取上にならずに御追放それから斯うした二人の難義併し大きうあッても假初にも殿様を怨んでハありません只何卒して親父様の御志しの通るやうと思ふ餘りに私も自害して夫婦の遺書を御取上あるやうと斯う支度して覺悟はしたれどお前の事が案じられて死なゝんだ…泣かずとも宜い最う自害などをする事では有りません若しも此先餓に迫りいよ〳〵詮方ないときはお前も一所に…武士の娘や女房ハ餓死したと云れてはなりません其時はよく覺悟を……併し其様な事ハ決して無い有りはしないが萬一の爲に今から聞せて置きますお前の伯父さん親父様の異腹の兄さんで田村厚德といふ人が江戸にお出なさる此人へ手紙を出しそれを便ッて江戸へ出てお前を立派な人にして死んだ親父様を悅ばせます…お悅ばせ申さなくつては私の道が立ません翌日にも手紙を出せば遲くて來月一杯早くば二十日前に返事が有りませう左様すれば何も彼も賣り拂つて路用とし此様な草深い原の中をよしてお江戸賑かな江戸へ出て…お前にも珍しいもの見せませうそれまでに私の眼も癒り少しでも仕事をして賃を溜め…そしてお前の晴着も整へて勇ましく行きませう私の衣服か…私のはナ…お前よまだ見せずに有るが好い

のが有ります斯んな能い日出たい工夫があつたもの何で私は死ぬ氣になつたか此樣な可愛い娘があるに……オホ…今考へれば私で私の鈍なのが可笑いオホ…可笑いオホ…ナウ娘早う江戸へ行きませうの
お累の詞は子を賺すにはあらで眞實に自害を止まりて江戸に居るお玉の伯父を便らんと思ひ翌日細々手紙を認めて飛脚屋に賴みたり然れども夫死去の時知らせやりしも何等の返事なく其前三四年も便りなきほどの中なれば親の泣寄袖に涙のかゝる時のみ賴みやるは如何あらんと危ぶめば手紙を出せし翌日よりはまだ着かぬとは知りながら其返事のみ待たれつゝ落葉の音にも外へ立ち出で便りやあると母と子が其事のみを云暮せしが翌月中も便りなく十二月に入り名宛の人は下谷車阪町には居ずとばかり手紙は封のまゝ歸り來りぬ母子は兎角詞はなく顔見合するばかりなり

昔の俤　下



吹くほどはなき春の風散るとしもなき花盛り上野の山は白雲の包みし上に絳き霞の引きもきらざる花見の人花をよそひて御手車立ち込む華族會館に婦人慈善會を開かれたり此に出入る人々は高位富貴の方々多き中にもいとゞ照り増る紅葉散しの悉多鹿子金色隱す唐織の帶に帶留結び添へ花美やかにして人柄よき八歲ばかりの娘が先に出づればアラお孃樣お待ち遊ばせと八丈づくめの腰元の跡より白領紋付の卅三四の貴婦人が今一人の女中を見かへりながら門を出で曳き持て來たる抱への車夫を少し歩くからと供にして盛の花を見廻らしながら娘が今ま腰元と戯れて散りたる葩を拾ふを見て思はずホロリとせられしを美しき彼の娘は振り返りさまオヤ母親樣はと不思議がる顔をつく〲見てお前に少し云聞す事がありますと云かけて二人の女中に何やら小聲に命じ人は通らぬ林の中の半より散り過たる只一木の櫻の本へ娘の領にとて持ち來りし肩掛を敷かせて我身と共に娘を乘せ舊昔の感に堪かねてや落る涙を懷紙に拭ひよい折からゆゑ話します私は丁度お前の年母上と諸共に此所で咽喉を突いて死なうとしました委しい仔細を知らぬ其方只左樣聞いては驚きませう思へば二十四年前今は櫻の此上野が紅葉の頃でありました私と母上と西根の伯父樣を便ッてさま〲の辛苦で江戸へ出て尋ねて見ても更に分らぬ其うちに元より手薄の路用は盡き如何せうと思ふ折不

圖聞けば根岸といふ所にお出との事にヤレ嬉しやと尋ねたれど戰爭後といひ朧氣の尋ね人二日掛ッても知れず三日目は泊る賃もなく尋ねあぐみて此の原へ暗に入つて草臥と共に倒れて仕舞ひ四日の朝は空腹を堪へてまた一日探したれど手掛りもなくよく〳〵運に盡きた母子國を出るとき覺悟をしたれば梢の葉より先へ散り此山に骸を止めませうと私が云ば母上もおうなづきなされいざとて私は父上がそれで御自害あされた御形見の短刀母上はまた祖母樣の御形見の懷刀拔き放して私が先へ死あうとしたを餘りといへば情ない此まゝお前を殺しては何としても御親父樣に申譯がないまるで所在が知れぬではなし根岸とだけは知れた上は今一日尋ねて見て夫で知れずは明日の夜こそとお止めなさるに私も氣が弱り其夜は二人聲を忍んで泣き明し翌日五日目の朝杖に縋ッて漸やく根岸へ出て今まで尋ね洩れたと思ふ邊を其所此所とうろつくうち或る曲り角から薊の花を提げてお出の方があッたのを夫とも知らず呼びかけて田村厚德樣といふ方が此邊にと聞く顏を不審ろうに御覽なすッて今は西根といふが私が元は田村厚德と云ッたと仰有ッたとき母上は嬉し淚にくれて其所へ倒れてお仕舞ひあすッたので伯父樣もお驚きて如何した譯だと私にお聞ても私も嬉しいやら悲しいやら分らず只泣くばかりで物が云はれず其うち母上が石津三平の妻子だと仰有ッたので伯父さんは仰天あされ其の三平の妻子が此の姿は何事だ先づ家へ來いと連れて行かれた所は一昨日も先一昨日も其の前を通つた家情ないやら殘念やら嬉しいやら悲しいやら今話しても咽かへる丈からだん〳〵の仔細を話し母上はいろ〳〵の御心配の重なりて御病氣となッたのでしばらく其まゝ居たなれど伯父樣も何におらうとも御方向がつかぬ時分特更獨身ではあり他家をお繼ぎなされた事ゆゑ私だけは世話を見るが母上は御實家へお歸りなされたが宜からうとのお詞に餘儀なく私だけ伯父樣の所へ殘り母上は御全快の上名殘惜しいがお前さへ飢凍えせねば私一人だけは國へ歸ッて水仕奉公してなりと過してお前の人並にあるを待ちますと伯父樣はじめ伯父樣の親御達に御禮を仰有ッてお歸りなさるに……付て……私は千住の大橋といふ所まで送りました其時の母上のお形は手織の袷の上へ古い單物一枚をお重ねなすッたばかり私は伯父さんの所に居れば寒い事はあい是から母親さんは寒さに向ッて寒い方へお歸りなさるのゆゑせめて是でもと私の襦袢を脫いて上げたら淋しい道中も是を着てお前と一途に旅をするつもりで居

る嬉しいよと仰有ッた…嬉しよと仰有ッた…お安やお前は仕合せで斯うして立派な形も成るが…垢だらけの木綿縞袢頂いて嬉しいよと仰有つた其時伺ほ伯父さんの家とは云へ義理ある他人の中必らず憎まれぬやうに又頭はぬやうにして呉れ私の事は呉々も案じるに及ばぬ親父さんのお形見を大事にしてと教へる母上もまた私も人立がして面目ないも忘れ大橋の上で聲を上げて泣きました…眼を泣き腫しました…夫から何時まで泣ても名殘は盡きない所が確に知れたうへは都度々々手紙をよこすゆゑ字はよく書けずと其方の手で返事をよこせ左らばぞと急いて先へお出なさるのが餘り名殘惜しいから跡から橋を渡り越すと母上は振り返ッて却ッてお前に左樣悲しがられると足が先へ出ないゆゑ何卒歸ッて呉れと仰有る…泣く〳〵橋をまた渡りかけ中途で振り返ると叱ッた母上が橋際に立て伸び上ッて此方を見てお出なさる…私も母上も驅け戻ッて亦泣き合ひました…其後年が經つて父上の忠義も顯はれ母上はお國でお手當を戴く伯父樣も御出世をなさる私も大きくなる父上の御形見の御遺書が大そう立派だとて人樣も御賞美なさる其方の親父樣と一途になつて親父樣は何事も誠實に御勉強ゆゑ今の御出世私も昔の苦を忘れ其中へ出來たお前も仕合せ只今に涙の種になるハ母上をお呼び迎へ申そうと思ッた春に御死去になッたのハ…何と云ても取返しのない一生の憾…お前の親父樣も其事を云出しては歎息なさるせめて御墓だけも此方へ置きたいと谷中の墓地へ印しを置いたは其譯…お前は仕合に生れて仕合に育ち仕合に終るとも此母や又祖母樣の御艱難を思ひ出し必らず奢りに流れぬやうになさい人に情をかけることを身の樂みとして下さい此座は丁度昔しの最期塲…お前も泣て呉れるかと母子の涙を知らぬ腰元奥樣雨がポッ〳〵降り出しましたよオヤ是でも谷中へ御參詣でございますの

（終）

吹く風のさそふ物とハ知りながら
ちりぬる花のしひて戀しき



あるのん物語

小引　原作は米國のあめりえ　らいずす女史の筆で、一昨年はじめて雜誌に出たものです。既に第廿一號のいらつめにも見えました、女史は米國文壇にはまだ新らしい顔の人ですが、今はほとんど婦人文學者の中の女王です。　今美妙齋君の指揮を受けて譯し、更に君の綿密な校正を經ました。　これに就ては美妙齋君の評が有ります。

まづ記して本文に入る口としましやう。

「閑靜や沈思を女史が好む點から言へば、女史は詩人ほわいとに似て、隨つてその小説も多く詩味を含む偏頗もありますが、氣骨は遙にほわいとの上です。　此あるのん物語など、殊にその偏頗の甚しいものですが、その甚しさと同時に女史が情欲を見る定見がまた甚だしく高く現れて居ます。　趣向に於ては喋々せず、その着眼と文章と氣韻とに於て評を下せば、着眼は高くて清く、文章は如何にも婉しく婦人らしくて落ち付いて、そして氣韻は一脉透つて居ます。　何に比較したらいゝか分かりませんが、假に婦人の手に成つた失樂園と言つたらば宜いでしやうか。　すべて柔は柔を粧つて內に剛を含む、その品位に至つては日の出の若詩人ろべるとと——男女相殊あるにしろ——甚しい逕庭は有りません。

あるのん物語を書く時の女史の眼中には人間の情欲——特に色欲——が純粹の愛と混同して、俗眼には愛が色欲で、そして色欲が愛としか見えぬ、それを憤慨した情が充ち溢れて居たやうに見えます。　まづ本文を出す前、破つたのは「罪」の一語で、徹頭徹尾その罪の因果が貫いて糸を引いて居ます。　形容は兎角詩めいた形容、しかしその形容も實に女史の他の作いんぢやなどのとは殊なつて最初から最早熱情（あるのん自身の）の迸りです」……

明治廿二年四月　たより識

あめりえ　らいずす　著

美妙齋　および　たより　合譯



わたしはのあ　ぜ　ばとりわるくの第四男、すなはち、しェむ、はむ、及ひじやふエすの弟です。　が、わたしが、悲

しくも、赦され難い罪を犯したため、誰も私をば何とも言はずになりました。

わたしは兄弟中一番わかく、まだ妻を持ちませんでした。が、兄たちは三人とも各々淑女と緣を結んだため、父ののあも大きに喜び、あッぱれ恥づかしくなく、能く配偶を撰んだと褒めて、また嫁たちをも可愛がりました。

しかし私の心はあせなすといふ麗はしい處女に結び付いて居て、そしてこの處女の父はけみユえると言ッて、金貸して酒呑みで、かつ神を信ぜぬ人です。

あせなすほど美くしいものは又と世に有りません。戀ひに焦れ死にする男子さへしばく有ります。あせなすが通ると、子供も遊戲の手を休めて之をながめ、また野の獸さへその美くしいのをば知つたやうです。その髮の毛は頭には冠のやうで、また肩には黃金の蛇のやうです。日には夜、そして顏には日中の朝さ、これが宿ッて居ます。

話しながら吹く罌粟の葉、あせなすの唇はそのやうで。その中の齒の白さは神前に供へる稚鳩のやうです。

身長は椰子の木のやうに高くて、且目覺ましく。身の動くのは風に吹かれた爲かのやうです。歩くのも普通の娘のやうに片足を片足の前に出しては行くとも見えぬほど。たゞ天使のやうに着物の裳裟つきの儘浮足で進むと見えます。

この處女が禮拜に來る時には毎でも私も會堂で待ち受けます。處女の母のみりおむは善良な婦人で、神をば畏れると子に教へた、その母に此處女は似ました、父とは違ッて。

そしてないざん（猶太曆の四月の名）の四日です、あせなすは乳香と沒藥および白鳩二疋、これを供へに來ました。頭にいたゞいた銀線の袚衣、足に穿ッた黃金の靴、衣物のはでやかさ、目覺ましさ、また床しさ。一年の若いところ、あたゝかに進む月日、それと同樣、にほやかに、うるはしく、そして目立ッて運步を移して來ます。袚衣の下の眼は薄綿雲にすきとほる星でしやうか。腕にとゞまる金の腕環、および脚目を抱く金銀の紐。

處女の父は地所も金も多く持つ身とて、今日も處女に侍女が四人ほど隸いて居ます。その中の二人は日光の接吻に色が黑く、鳶色が金線の衣物から洩れて見えますが、殘りの二人は美くしく、そして衣裳は青と銀線との織り交ぜて、また前の二人は緋百合、後のは梓白合を手に持ッて居て、そしてあせなすの前後を守ッて來ます。

處女の衣裳や髮の香ひが鼻に忍んで來た時には私はほとんど氣をうしなッて地にたふれるばかり。わづかに寺の柱に身を持たせ、戀の極、思はず叫び出すかと恐れて我とわが息をさへ差し扣へて居ました。

神前に進んで行く處女。

そして、あら、やゝ供物を捧げやうと跪くその途端、珍事、一疋の鳩が逃げて、風に乘る白い花のやうに舞ひ上がッて寺の屋根の薄暗い處へ行きました。

思はず處女は自身その手を摑み合ッて、そして戰へて――業か因かその思ひ定めも出來ません。

困ッた樣子が目にあらはれる、それを見ては私も憂をわかちました。　目をあげて鳩を見送ッて居る内にやがて鳩は、さながら夜下界に白雪が緩み降るやうに、次第々々私の前に靜に浮かび下りました。　で、私も動かず待ッて居ました。が、その内に、妙、鳩は私から手がとゞく程の處の寺の角に止まッて、やゝ羽を揃へ出しました。

直に脫いで私は上衣を、そして徐かに這ッて鳩に近づき、急にそれを被せました。　立騷ぐ鳩の波瀾つき、もう安心と私も踵をかへし、神前に待ッて居るあせなすの方に足を移しました。　處女は手をひろげました、そして私は鳩をわたした、その時です、われ〳〵の目が互に向き合ッたのは。

向き合ッた處で、二人ながら煩惱の絆につながれました。

いつか血は處女の口莖や咽喉やまた胸を汚しました。　その薄紅い胸に鳩を當てゝ居るさまは東も曙色になる曉方の空に白帆を懸けたやうで、そして首低れて只頰を鳩にこすりつけました。　が、われ〳〵は言葉も交しません、此處からとて、寺では話しをせぬものです。

外へ出るや否や、少女は侍女を待たせ、私しに向ッて言ひました。「御名は何と仰やいますか、仰やッて下さいませ、今日の御禮を申したうございますから」。

私は答へました。「私はあるのんと申して、のあ　ぜ　ばとりあるくの子でございます」。

「おや」、處女が言ひました、「あの御老人、御心暗くもあるくを作ッて人間をすべて載せやうと言ふ？」

「いゝえ。それは貴娘御聞き違ひ。あるく一つで人間殘らず救へぬとは存じて居ります、たゞ自分と小兒たちばかりを載せるつもりで」。

「それならそれとして」、處女は笑を含みました、「それ

にしてもそれだけの物の入る舟を浮かべる水が何處にありましやう」。

「それは一朝一夕で話し、盡くせません。　もし貴娘の處へ私しがまゐつても宜しいやうに貴娘が親御さんに御話しになりましたなら、殘らず申し上げましやう」。

「あ、そんなら左樣申しましやう」。

此日はこれでわかれました。　次の日の夕方、蒲萄園で私しが働らいて居ると立派な着物を着た老女が一人たづねて來ました。

そして傍へ來て私にかう言ひました。「あなたがのあぜばどりあるくさんの御子のあるのんさんで？」

「はい」。　私がこたへました。

「妾は主人あせなすの使にまゐりましたので、あの金貸のけみゆえるの御娘さまの」。

「何御用で」。

「御娘さまが貴下にこの妾と一途に直に入らつしやるやうにと申しました」。

この言葉が訖らぬ内です、早私は幾步か蒲萄園を出掛けました。

か、先方が先方ゆゑ、私もまづ沐浴して身を潔め、衣服をあらためて、延金の襟をつけ、やがて行つて處女に會ひました。

さてけみゆえるの家の庭には泉水もあり、蘆薈もあり、また椰子もあり、その他種々の色の花も有りました。　庭の周圍には齊篠が有つて雜色の銀の布が掛かつて居たり、紅あるひは綠の鳥が金環で鞦韆などをして居たり、また犬など紅玉と綠玉とを鏤めた銀の襟を掛けたのが絹流蘇のやうに、長く、白い毛を、眠つて夕日に映らせて、こまかな銀糸を赫かせます。

で、絹の帳をかゝげて侍女が私を中へ誘つて、そこで私しは入つてあせなすの面前に出ました。

見ればあせなすの衣物は雨後の白百合のやうで、その髮は花の金心のやうです。　細微な金糸で巧に縫ひ取つた眞紅の絹の枕、それに倚つて居る處女の足下には私と共に入つた犬が臥しました。

やがて立ち去つた侍女、絹の帳につゝまれて差向ひにあつたわれ〳〵二人。　あせなすを掩ふやうにあつて居る金瓶の石榴、物語しながらも少女は指で花を摘んで唇で裂いて居ま

す。

終にから言ひました「御約束の事、御はなし下さいましやうか」。

そこで私も父ののあが話した事を語げると、處女も意外に息もつけぬやうです。

語り了れば、顏はその着物のやうな色になッて、唇さへも蒼ざめました。

「今」、處女は言ひました「仰ッた事は一々貴郞も御信じなさいますの？」

「はイ、一言でも」。

聞いてゐせあすは手の指を左右組み合はせて膝に落とした ばかり。夢に夢見る心持で、やうやくに囁く聲の低さ。「ては私の阿父さんも、また私も一途に死」……いつかその手に淚は流れ落ちました。

我と我に命令する心。私は少女の側に跪いて——酌み憐れむあまり——私の唇でその手の淚を拭ッてやりました。

「それほど貴郞は」、處女が言ひました、私の頭にその手を載せて、「私を思ッて下さいますの？」

「いゑ、貴孃を思ふ度には程も限りもありません」。

「嬉しさを何と申したら、嬉しいといふのも恥かしくて」。

で、私はその口に接吻しました。

時もいつか移りました。處女は言ひました。

「貴郞に歌を一つ御謠ひ申しましやう」。

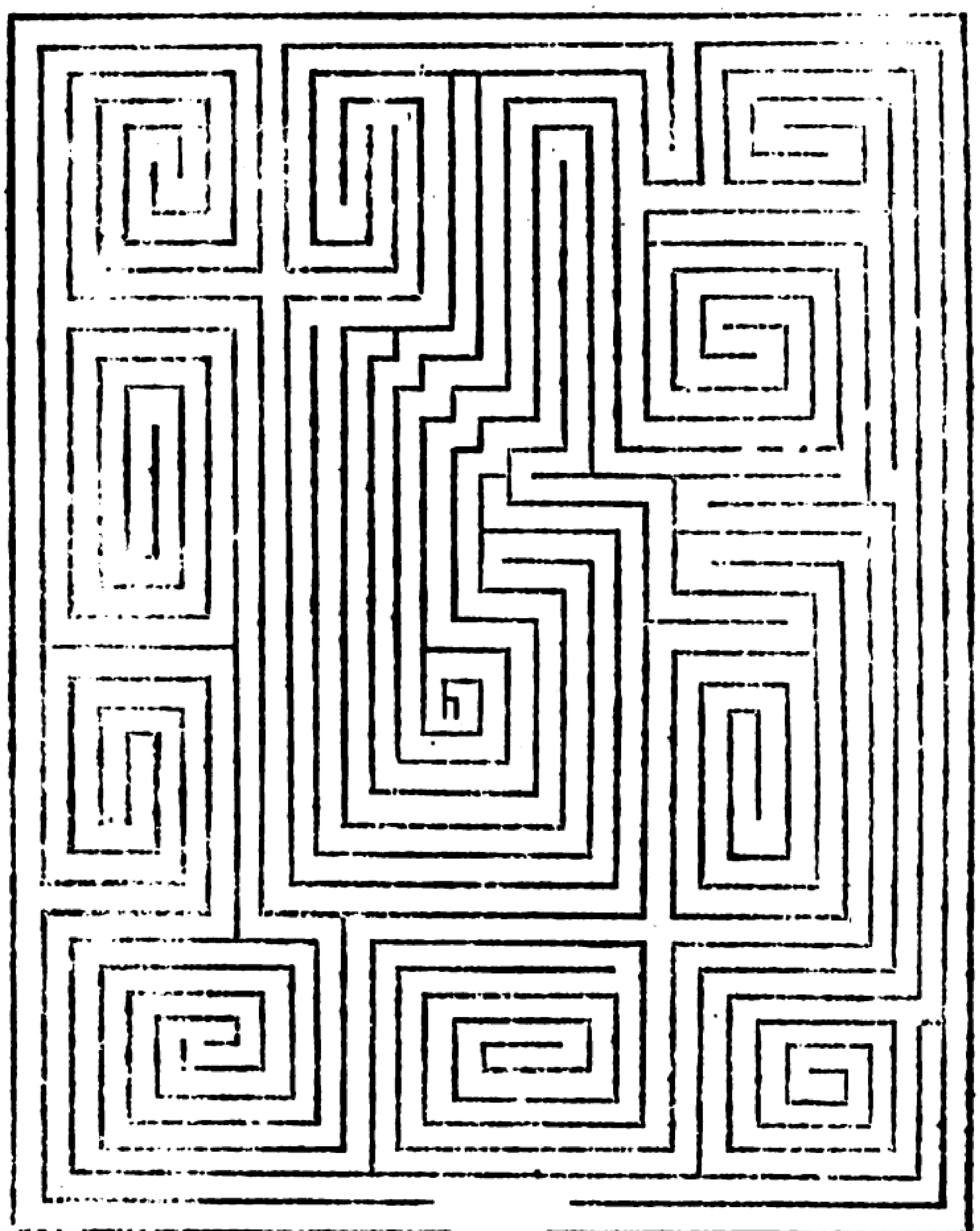
「はイ、心の心から御願ひ申します、世界に貴孃の聲より美くしいのが有るとも思はれませんから」。

そこで處女は斯う謠ひ出しました。

（原詩廿曲、節五曲）

千萬の花の中われ一人、數知れぬ花のなかわれあれれ。
慰めぬ鳥のうた、その聲はわかまつば吹きと尾す夜風の息。
ねふり無き夜のうめき。
見よ「慰め」は山よりもこず、空にさへ影もなし。わが淚に
立つきりその目をや包みけむ、溜息に載せられてわれを
捨て行きにけむ。
聞け姉妹見なゆるしそて子に死おれのぞみ絕えし母の思ひそ
れとしも似たるわがこゝろ。喃、姉妹、かなしさはこがれ
しぬまで。手を伸べてわれいだけ、君の目の光りにてわれ
なぐさめよ。君の聲の音樂にてわれ悅ばせよ。笑ひつゝわ
れ助けてよ。
戀人にわれはわかれぬ「愛」絕えて胸も燃えぬ。死ぬまでの
なげきか〔illegible〕、かの人は〔illegible〕からで。

門口より入りて
正座に着くの路
筋如何に



門口

入る者は多く
達くものは尠なし。

道は二つ
只だ仁と不仁とのみ。

廣告

政治社會經濟及文學之評論

國民之友

THE NATION'S FRIEND

毎月三回二之日刊行

○定價一冊六錢十冊前金六拾錢廿冊前金壹圓拾錢(府外は別に毎冊郵稅一錢宛)

國民之友は政治、社會、經濟、及ひ文學の評論として、今日我邦無數の新聞雜誌世界に單身獨歩一頭地を出したる雜誌なり、其の議論文章躰裁等ょ至るまで、皆な優に獨自一己の面目を存し、敢て他に摸倣せす、又た他の摸倣し能はさる所のものを有す、其の議論は大膽不羈なれ共、又た決して無責任の言を吐かす、其の期する所は坐して言ふへく、起て行ふへき經世實用の點に外ならす、其の着眼は奇警なり、其の批評は精嚴なり、其の調子は洸重なり、其の理想は純潔なり、而して文學上に至ては精を鍾め、萃を拔く、實に新日本文學の一大現象たるに恥ちす、苟も當今の時勢に通し、天下の大勢を察し、我國知識的道德的の最新最淸なる大氣を呼吸し、社會水平の上を歩まんと欲するの諸君は、必す一讀せさるへからさる雜誌なり、

●四月二十二日發兌第四拾八號には日本諸名家六十余名の嗜好書目及其書翰書目十種の附錄十八頁を添へたり

●五月二日に第四十九號を發兌●次號の發兌は五月十一日

○廣告料一行(五号活字廿四字)金拾壹錢(行数回數ま依り割引あり)

東京民友社發行

京橋區日吉町廿番地

國民之友發行所民友社出版の發賣書目

○美麗なる小本 婦人及家政 全一冊 紙數百六十余頁 定價拾錢郵稅六錢

○政治一斑第一冊 人民 全一冊 紙數七十五頁 郵稅共定價七錢

○政治一斑第二冊 地方制度 全一冊 紙數六拾七頁 郵稅共定價七錢

○政治一斑第三冊 國會 全一冊 紙數七拾四頁 郵稅共定價七錢

○政治一斑第四冊 中央政府 全一冊 紙數七拾六頁 郵稅共定價七錢

○政治一斑第五冊 議員撰擧 全一冊 紙數七十二頁 定價金六錢

○昨年自七月至十二月自第廿五號至第卅六號 國民之友第三卷合本 總目錄附 上等製本 改正定價 金六拾五錢

○廿一年自一月至六月自第拾四號至第廿四號 國民之友第二卷合本 總目錄附 上等製本 定價六拾錢 通常製本 定價五拾錢

○自第九號至第拾四號國民之友社說及特別寄書 國民之友第二集 定價十五錢 郵稅金十錢

全國無遞送料

各書定價郵券(一錢切手に限る)代用不苦

交詢案内

(郵劵十錢送れ
委細に申來れ
催促する勿れ)

●雇はれたき方(乙)

六	奉公	地方師範學校卒業生にて學費に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學勞雇はれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし
七	裁縫	年齡廿三にして家内の手助けとならんが爲め内職に裁縫に雇はれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき内にて築地邊ならば通いても宜しとのと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し
十三	教師	栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にても教授に雇はれたきものあり可成くは麹町か駿河台邊を望む
一九	召使	裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇はれたし
二〇	裁縫	年齡十四五才にて華族樣か或官員方の御方之内に小間使に雇はれたし最も餘暇に讀書授けくだされば給料は不申受
二四	奉公	年齡廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
二五	裁縫	裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御内に教師に雇はれたし
二八	奉公	普通小學科卒業の者にて(年齡二十二才)産婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ余暇に産婆術を學び度ものあり

婦人衛生會

本月四日午後一時より四谷門外華族女學校に於て例會相開き候間會員諸君は勿論會員外の婦人方も御來聽わらんことを希望す尚ほ當日の講師演題は左の如し

演題

（まどのお噺し）色川國士君
（口腔一斑）荒川脩君
（未定）弘田長君

私立大日本婦人衛生會　京橋區日吉町八番地

●東京女學校●●神田區猿樂町十三番地●●生徒募集

本科（和、漢、英學）別科、夜學科（英學）手藝科（裁縫、編物）各級へ入學を許す

身躰強壯少シク敎育アリ年齡二十ヨリ三十位迄ノ基督敎信者ニテ外國宣敎師ノ内ニ在テ小兒ノ世話ヲナス召使ノ婦人一名ヲ雇タシ小兒ハ一人ナリ少シク英語ヲ解シ且ツ外國人ノ家事ノ手助ニ慣タル婦人ナレハ更ニ好シ望ノ方ハ本月中ニ麻布本村町二百十七番地ヘ來談アレ時限ハ午後二時半ヨリ三時半迄トス

同志社寄附金（四月三十日迄）

金壹圓　本郷區森川町一番地　小林榮子
同壹圓　伊豫國桑村郡高知村　大澤竹子
同拾錢　同　山下房二郎
小計　金二圓拾錢
合計　金五拾圓

巖本善治編
女學叢書 **木村鐙子小傳**　定價十錢　郵税六錢

右は鐙子刀自の佳傳にて姉妹の必ず閲讀せらるべき價値あるものなり勝安房伯島田三郎外山正一諸氏の序跋あり

發兌　東京京橋區日吉町八番地　**女學雜誌社**

發兌

五月。四日　十一日　十八日　廿五日
六月。一日　八日　十五日　廿二日　廿九日
七月。六日　十三日　二十日　廿七日
八月。三日　十日　十七日　廿四日　卅一日

定價

一册。六錢　郵税。一錢（但府内無郵税）
十册。五十八錢郵税。十錢（同前）
半年分　一圓四十三錢　府外は　一圓六十九錢
一年分　二圓六十錢　府外は　三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部増の割合と定む

一行　一回　（廿七字詰）　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町殿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元冨士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボ1ド○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町○木村文助○尾張國名古屋本町○石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥平堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年五月二日印刷
明治二十二年五月四日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　**女學雜誌社**

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* .3.12 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.